

# 分科会 I 提案事項

## 小 学 校

第1分科会	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進……………	43
第2分科会	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに 学校教育の充実を図る評価・改善の推進……………	47
第3分科会	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント ～「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取り組み～……………	51
第4分科会	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント……………	55
第5分科会	学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 ～教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実～……………	59
第6分科会	これからの学校を担うリーダーの育成 ～学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成～…	63
第7分科会	命を守る安全教育・防災教育の推進並びに様々な危機への対応……………	67
第8分科会	社会形成能力を育む教育の推進 ～自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進～……………	71
第9分科会	自立と共生を図り、実践的な態度を育む教育の推進並びに 家庭・地域等との連携……………	75
第10分科会	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、 校長の理念と指導性……………	79

## 第1分科会

## 研究主題

先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

提案者：仲宗根 勝也（名護小学校）  
 司会者：大 城 豊（高江小学校）  
 記録者：新 垣 郁 代（中川小学校）  
 ”：島 袋 ゆかり（嘉芸小学校）  
 運営委員：島 袋 ゆかり（嘉芸小学校）

## 1 はじめに

本分科会は、沖縄県北部の名護市にある大規模校の名護小学校、山林に囲まれた東村にある極小規模校の高江小学校、海に囲まれた瀬底島にある小規模校の瀬底小学校、豊かな自然に恵まれた大宜味村にある小規模校の大宜味小学校の4校で構成された分科会である。4つの市町村で学校規模も大きく異なるため、本分科会では「学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進」の主題のもと、共同研究員個々の学校の特色を生かした経営ビジョンを策定し、各々の実践を通して得た成果や課題を考察し共有しながら研究を深めていくこととした。

## 2 主題設定の理由

グローバル化、情報化が急速に進展する予測困難な社会において、時代の要請・社会の変化に対応できる学校教育の在り方が問われている。学習指導要領では、これからの時代に求められる教育を実現するためには「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し、学校と社会がより一層、連携・協働することが求められている。そのためには「社会に開かれた教育課程の編成」が重要であり、校長はこれからの社会を生き抜く子供たちの望ましい姿を思い描き、未来を見据えた明確な学校経営ビジョンを示し、学校経営に努めなければならない。学校経営ビジョンについて村瀬（2020）は、「学校組織の成員（教職員だけでなく児童生徒、さらには保護者等も含む）の教育・学習の実践に際して思考と判断の拠り所となり、「自分はどこを向いて何をすればよいのかが分かる」もの。誰もが共有できるイメージとしてある程度の具体性を持つと同時に、成員の個性や創意工夫を保護するだけの幅のある抽象性を兼ね備えている。」<sup>1)</sup>としている。そこで、本分科会では、その定義に依拠し、明確でわかりやすい学校経営ビジョンを策定し、それを、教職員だけでなく児童・保護者・地域に共有することで、学校や地域の特色を生かした創意ある学校経営ができると仮説を立て、以下の視点で研究を推進した。

## 3 研究の視点

- (1) 明確なビジョンの策定と共有
- (2) 創意ある学校経営の推進

## 4 研究の実際

## (1) 名護市立名護小学校の実践

本校は名護市街地の中心部に位置し、創立141年目を迎える伝統校である。琉球で初めての学校(明倫堂)を建てるなどして教育を広め、後に名護間切の総地頭(名護親方)となった程順則の「六論衍義」をもとにした「六論のこころ」を目標に実践を展開している特色がある一方、学校目標もあるため、ダブルスタンダード的な目標となっていると感じた。そこで、児童や教師が「何をすればよいのかが分かる」ビジョンをつくり、それをコンパスとすることで、「どこに向かう」かわかる明確なビジョンになるのではないかと考えた。

## ① 明確なビジョンの策定と共有

ア 思考の拠り所となる4つの「きく」を赴任年度当初に学年主任会で協議し策定した。

- ・「聴く」傾聴、他者尊重、自己肯定感の向上
- ・「訊く」質問、主体的な学び、支持的風土
- ・「利く」気づき、目配り、環境、他者理解
- ・「効く」効果の可視化、評価、SDGs

イ 教職員の個性や創意工夫を保護する組織・任せる組織として「チーム シップス 名護」をスローガンとする。一つの船→船団へ

ウ CS（学校運営協議会）で学校経営ビジョンの承認を行うとともに、目指す家庭・地域像について協議（ワークショップ）を行った。また、CSの柱を「熟議」とし、学校課題だけでなく、家庭・地域の課題も熟議した。

エ 校長講話で「きく」コンパスの話を2回実施し全児童に共有後、学校だよりで全保護者へ発信し共有した。

- ・「聴く」目と耳と心できく
- ・「訊く」質問する。わからないことをわからないままにしない
- ・「利く」困っている人、環境などに気づく、気づいたら行動する
- ・「効く」粘り強く取り組む

## ② 創意ある「きく」学校経営の推進

ア 「きく授業」を推進し、授業のリフレクションでタブレット端末を活用し、全職員の声ができるようにするとともに、子供の学ぶ姿を

中心に研究協議を行った。

イ 児童会を中心にクラブ活動の種類や休み時間の過ごし方について、協議させ実施した。

ウ 「子供の声が届く学校」を目指し、児童の学校評価の分析結果を児童へ示すとともに、特に、児童の意見や要望については、校長講話で回答した。

エ 「保護者の声が届く学校・地域」を目指し、授業参観日に保護者の声を聴く会として、管理職とPTA役員、CS委員を図書室に待機させ、懇談・相談の場とした。

オ 学校課題を軸にプロジェクトチーム（学力向上、校内研究、生徒指導）を機能化させ、全教職員が主体的・創造的に学校課題に取り組めるような体制を構築した

カ 幼稚園教諭と協議し、より幼稚園生活に近いスタートカリキュラムへと見直すとともに、1年生教室前に大きな砂場をPTA作業で作り、教室には、遊びボックスを設置した。

キ 始業時の号令の代わりに「名護ストレッチ」を導入し体幹を整えることで授業への集中力向上を図った。

③ 校長の関わりと今後の方向性

ア 校長講話や集会での話、学校だよりや校長コラムなど様々な発信の場で、学校ビジョンを意識して行うことで、共有を図る。

イ 学年・学級目標や教職員評価システム、学校評価の視点にも「きく」を位置づけ、カリキュラムマネジメントの充実を図る。

ウ 支持的風土のある学級、風通しが良く学び合いのある職員室など「きく学校」として地域とともにある学校経営を推進する。

の関心は高く、小規模校や地域の優位性を最大限に生かす学校経営に取り組んでいる。

① 明確なビジョンの策定と共有

ア 校長が赴任1年目に捉えた児童・保護者・地域・教職員の実態や、学校評価等から見えてくるそれぞれの想いを踏まえて、年度途中で経営ビジョンやキーワードを策定。

イ 学校や地域の特色を生かして「保護者・地域に開かれ共に歩む信頼され魅力ある学校」をつくるという学校経営ビジョンの最重要テーマを職員・児童・保護者・地域に示し、「高め合い」「協働」をキーワードとして実践。

ウ 学校便り、学校HP、週案メッセージ、校長講話等で繰り返し触れ共有を図る。

② 創意ある学校経営の推進

ア 地域の教育資源（人・物・事）を効果的に活用するとともに情報を積極的に発信する。

- ・各学年のカリキュラムマネジメント表の具体案を提示し積極的活用を提案

イ 外部専門機関等との連携を積極的に行い、瀬底島の希少性・卓越性について学習する海洋プログラム等を実施し、ふるさとに誇りと愛着を持つ児童を育む。

- ・5・6年生を対象にシュノーケリング体験学習やサンゴ観察等を保護者・地域・関係機関との協働で実施。その様子や成果を児童がホームページで発信。

- ・全幼児児童による遠足（瀬底の磯歩き）やグラスカヌー体験、3・4年生のウミガメ学習等の海洋学習を実施。

- ・各種体験を通してSDGsへの関心が高まり、多様なアイデアで学習活動を展開。

ウ 本校の魅力ある効果的な取組を継続。（運動会・学習発表会における地域の伝統芸能継承の取組、親子で夢ファイル、朝のスロージョギング、縦割り活動等）

学校経営ビジョン 名護市立名護小学校 チーム SHIPS 2022

☆学校教育目標 未来を拓くたくましい子の育成

○考えつくりだす子 ○心をみがく子 ○体をきたえる子

「行きたい、学びたい」4つの「きく」

【六つのことろを響かせる】  
1. 知能・感性・身体性を伸ばし、個性を伸ばす  
2. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
3. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

(2) 本部町立瀬底小学校の実践

本校は本部半島西方の瀬底島に位置し風光明媚な場所にある。四方を海に囲まれ美しいサンゴ礁の海を有しているため、観光客や世界中のサンゴ礁の研究者が毎年島を訪れている。

児童は全体的に素直で礼儀正しく、学習や各種活動に前向きに取り組む子が多い。保護者や地域の学校へ

令和5年度 瀬底小学校グランドデザイン

学校経営ビジョン (補完版) 未来を拓くたくましい子の育成

「生命に響かされた海を渡る旅の感動を学校づくり」

【六つのことろを響かせる】  
1. 知能・感性・身体性を伸ばし、個性を伸ばす  
2. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
3. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む

【六つのことろを育む】  
1. 心身の健康を促し、たくましく育む  
2. 自ら考え、自ら行動し、自ら責任を担う  
3. 思いやり・協働性を育み、共に学び合う  
4. 地域・社会とつながり、共に生きる力を育む



③ 校長の関わりと今後の方向性

- ア 学校経営ビジョンを明確にし、発信や共有の方法を工夫し、職員・児童・保護者・地域との協働体制で推進する。
- イ 学校便り等を通して、校長が学校経営上大事にしている想いを伝える。学校の様々な教育活動や児童の頑張り、保護者・地域の関わりについて価値付けを行い、持続可能で魅力的な学校経営を目指す。
- ウ 学校経営ビジョンの具現化のために作成した各種シートを教職員評価システムと関連付けることにより、教職員のカリキュラムマネジメントへの参画を促し、ベクトルを揃え推進を図る。

- ・学校教育活動としての位置づけと取組
- ・学校行事及び地域行事を通じた保護者や地域の方々との体験交流の計画実施
- エ 学校情報の積極的発信
  - ・学校便りの高江区全世帯への配布
  - ・学校HP、新聞・TV等マスメディアを活用し、効果的な情報発信の工夫

③ 校長の関わりと今後の方向性

本校赴任2年目、これまでの学校経営ビジョンを継承・発展すべく、学校評価等を基に本校の良さや課題を分析し、全職員共通理解を図り、魅力ある学校づくりを目指し、今年度をスタートさせた。

学校評価アンケート結果を踏まえ、実態把握と理解に努め、様々な機会を通して学校経営ビジョンを示しながら、地域と連携した学校行事や体験学習、生活指導等に取り組むことで、子供への教育効果や保護者や地域からの学校への信頼及び存在意義も高めていけると実感している。

今後も更に本校教育に信頼と期待を寄せる保護者・地域住民、関係機関と連携し、地域教育資源を活用し、本校だからこそできる豊かな体験活動を通じた教育活動、カリキュラム開発等にチャレンジし持続可能で魅力的な学校経営に取り組んでいきたい。

(3) 東村立高江小学校の実践

本校は沖縄本島北部、東村の北端に位置する山原の豊かな自然に囲まれた風光明媚な高台にあり、創立115年の歴史と伝統ある1区1校の極小規模校である。(平成28年度中学校は統廃合の為閉校)

本校児童は、明るく素直で何事にも前向きに取り組むことができる児童が多い反面、人間関係の固定化等、少人数ゆえの課題がある。

そこで「地域に根ざし小規模校のよさを活かした教育活動を推進し、互いに認め学び合い、一人一人の良さや可能性を引き出し伸ばす学校づくり」を学校経営の理念とし、課題解決に向け地域の教育資源を活用した教育活動を推進している。

① 明確なビジョンの策定と共有

- ア 極小規模校の現状と児童の実態把握
- イ 学校、地域の課題把握（保護者地域の願い）

② 創意ある学校経営の推進

- ア 「豊かな関わり」を育む授業づくり
  - ・授業での地域教育資源（人材）の積極的活用
  - ・タブレット端末を活用した授業づくり
  - ・合同学習や村内他小学校との集合学習
  - ・修学旅行 ・水泳学習 ・ていーだ学校等
  - ・豊かな感性を育む読書活動
  - ・一斉読書 ・ビブリオバトル等
  - ・集会活動における異学年交流の工夫
  - ・ゆんたくタイム ・体育朝会等
- イ 視野を広げるキャリア教育活動の取組
  - ・地域人材や学校職員等によるキャリア講話
  - ・モノづくりや栽培活動等の多様な体験活動
  - ・保護者の職業技術を活かした体験教室の開催
  - ・学校教材園や水田における栽培収穫活動
  - ・博物館等の外部教育機関の積極的活用等
- ウ 地域・学校課題への対応
  - ・学校登り窯復活プロジェクトの継続推進
  - ・復活した登り窯を活用した陶芸体験活動



(4) 大宜味村立大宜味小学校の実践

本校には「人材を以て資源と為す」の村是を具現化し、将来の大宜味村を担う子供たちの成長に期待する村民の願いが詰まっている。学校経営のビジョンを『ごづくり（学びづくり・仲間づくり・健康づくり・魅力

ある学校づくり・地域づくり』として掲げ、村民の願い、信託に応える学校づくりに努めている。

① 明確なビジョンの策定と共有

ア 教職員への働きかけ

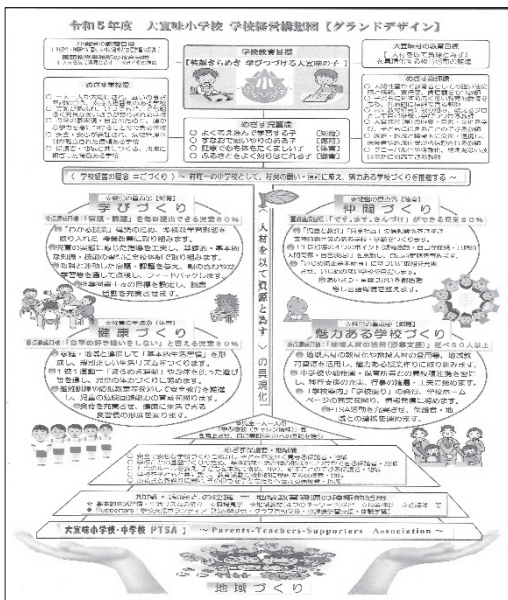
教職員が一目で学校のグランドデザインを理解できるようにした。これにより児童の資質・能力を育むための方向性を共有するとともに、全職員で全校児童を育てていこうという学校組織の風土をつくる。

イ 児童への働きかけ

校長講話で村の魅力（自然・文化・歴史）について共有し生活科や総合学習での学びに繋がっていることを理解させ、学ぶ意義や喜びを捉えさせる。

ウ 家庭・地域への働きかけ

学校経営ビジョン具現化への取り組みが伝わるよう様々な情報手段を活用し、積極的な公開・開示に努める。



② 創意ある学校経営の推進

ア 地域の特色を生かした取組の推進

- ・地域人材の授業は登用数を年間目標として設定させ、教職員評価システムの目標値と連動させる。
- ・3年～6年までの「総合的な学習の時間」のテーマを「大宜味村の村づくり4つのキーワード」とし、学年毎にそれぞれ設定する。

【3年＝シークワサー 4年＝芭蕉布  
5年＝長寿 6年＝ブナガヤ自然・文化】  
内容の充実・深化を図る。

- ・教育委員会や社会福祉協議会等と連携・協力し学習内容の充実に努める。

イ 視野を広げるキャリア活動取組の推進

- ・年間計画に「キャリア教育推進月間」を位置づけるとともに「夢語る講演会」を実施し児童のキャリア発達を促す。

- ・琉球大学と連携し、大学での体験学習を行う。（講義・新聞づくり・学食等）

ウ 家庭地域への学校情報の積極的な公開と開示に努める。

- ・学校便りの村民全世帯（1400）への配布。
- ・行政無線放送を通した学校行事等の告知。

③ 校長の関わりと今後の方向性

ア 教育課程、教育活動の反省と課題を踏まえ明確な学校経営ビジョンを設定し、職員・児童・家庭・地域に具体的に示し、協働体制で推進する。

イ 校長講話や集会等で、職員や児童に目指す児童像や目標を意識させることで、学校全体の風土づくりに努める。

5 成果と課題

(1) 成果

ア わかりやすく明確なビジョンを策定することで児童や教職員、保護者や地域住民と共に、創意工夫のある教育活動が展開できた。

イ 校長の経営ビジョンを職員・児童・保護者・地域に明確に示し、共有することで、学校経営参画への意識付け、当事者意識が高まった。

(2) 課題

ア 「社会に開かれた教育課程」の推進に向け地域教育資源の開発と積極的活用と進める。

イ 策定した学校経営ビジョンについてカリキュラムマネジメントを推進し、持続可能で魅力ある学校経営を目指していく。

6 おわりに

本分科会では、研究テーマの「先見性のある」「未来を見据えた」ビジョンとは、どのようなビジョンだろうかと問いを持ち、共同研究をすすめてきた。その際、グローバル化、情報化が急速に進展する予測困難な社会だからこそ、「自分はどこを向いて何をすればよいのかが分かる」明確なビジョンと創造性を担保できる幅のあるビジョンを研究の視点に、創意ある学校経営を推進した。研究を進めながら、先見性のある学校経営ビジョンとは、不易の「生きる力」の育成を基盤に、学校像、児童像、教師像、家庭・地域像を学校の関わる全ての成員で共有し、多様性を認め、持続可能な方向へと更新をするものであると考えた。「目的地と方向を示し、任せ、責任をとる。」ことが校長の役目であることを胸に、今後も、マネジメントサイクルを活かし研究を推進したい。

<sup>1)</sup> 村瀬正胤編「私がわたしらしく育つ学校」麻の葉出版、2020年、10ページ

## 第2分科会

## 研究主題

学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに学校教育の充実を図る評価・改善の推進

提案者：磯部大輔（石垣小学校）  
司会者：真玉橋 真由美（伊野田小学校）  
記録者：與世山 操（大本小学校）  
運営委員：安慶田 正人（金武小学校）

## 1 はじめに

校長は「新たな知を拓く」教育を実現するために掲げた学校経営ビジョンの実現に向け、活力ある組織・運営体制を築いていく必要がある。そのためには、学校組織を刷新し活気ある組織づくりを行うとともに、教職員一人一人が協働意識と当事者意識をもって学校運営に参画することが求められる。特に八重山地区の多くを占める小規模校、極小規模校においては、一人あたりの校務分掌が多く、より一層教職員一人一人が自分事として物事を捉え、組織を機能させていかなければならない。

ここでは、本地区の3校における事例を取り上げ、その成果と課題を明らかにする

## 2 研究の視点

- (1) 学校経営ビジョン策定の経緯
- (2) 学校経営ビジョンに基づく組織・運営

## 3 研究の実際

- (1) 学校経営ビジョン策定の経緯

学校経営ビジョンが必要と言われているが、その捉え方は各校長によって様々である。そもそも、それがなぜ必要なのか、どのように策定していくことが望ましいのか、原点に立ち戻って確認することから始めた。

まず、学校における「ビジョン」とは次の4点であることを確認した。

『①実現したい将来への見通し、将来のなりたい姿や状態 ②組織の背骨であり骨格 ③組織の使命（ミッション：組織の目的、果たすべき役割）を達成するための目標 ④教職員皆で目指す「共通の行先」』<sup>※注①</sup>

そして、ビジョンが明確になることによって、次の効果があることがわかった。

『①組織の将来が見えてくる ②教職員それぞれにとって、自分が何をすべきか見えてくる ③自らの将来像も描くことができるようになる』<sup>※注①</sup>

特に効果②は、本地区のように小規模校、極小規模校が多く一人あたりの校務分掌が多い状況では、より一層効果的であると確認した。

## ■石垣市立石垣小学校（児童数367名、職員数30名）

## ① 全教職員参画による学校教育目標見直し

「児童の実態」や「教師の願い」、「資質・能力の三つの柱」を全教職員で整理し、よりよい学校の方向性を全職員で確認した。

以前の教育目標は「知・徳・体」ベースのものであった。その教育目標を踏まえ、加速度的に変化する社会を生きる子どもに必要な資質・能力を育成するため、「自律と共生」を柱とすることに全職員で決定した。

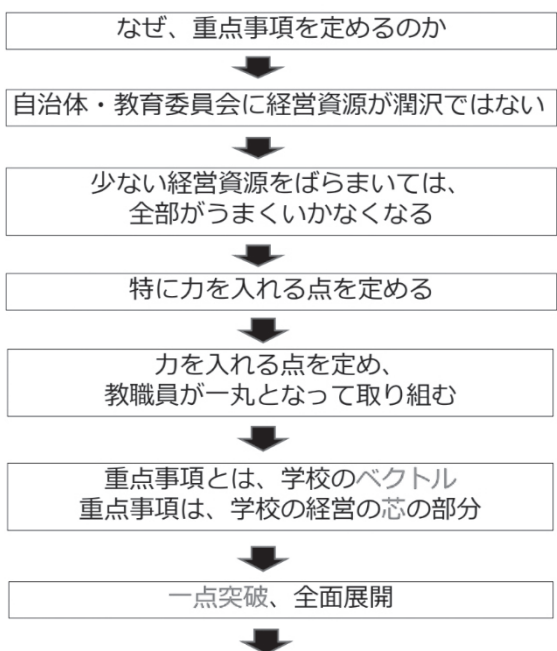
具体的な学校教育目標の文言決定には様々な意見が出たが、「子ども」を主語にすることで意見が収れんした。

職員それぞれの意見を受け止める場を設けることで、各自が「自分事」として新しい学校教育目標を捉えることにつながっている。

## ② 重点目標の決定

決定した学校教育目標を骨子として、目指す子ども像、重点目標、育成する資質能力を決定した。重点目標決定には、次の流れを重視した。

## 学校の重点事項





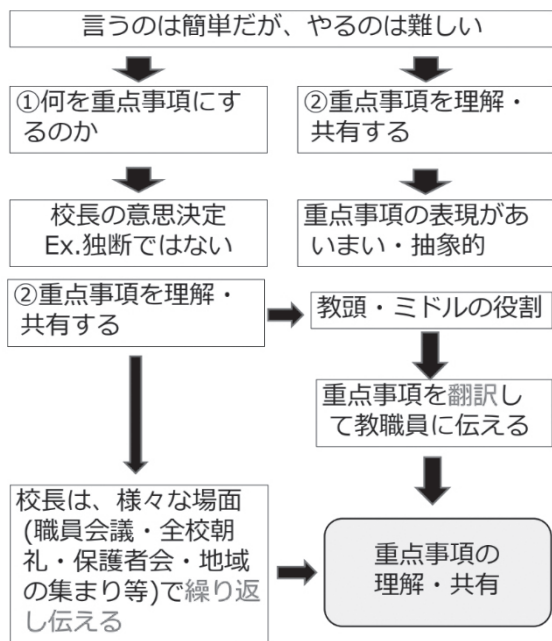


図1 NITS校内研修シリーズ#97「学校のビジョンと戦略」天笠 茂

③ ゴールイメージ、ストーリーイメージを共有する  
明快な学校ランドデザイン作成

上記の流れを踏まえ、学校経営ビジョンを策定した。そのビジョンを具現化するためには、到達すべき目標（ゴール・イメージ）や手立てとなる諸教育活動等（ストーリー・イメージ）を共有することが重要だと考えた。そのためは、ビジョンをわかりやすく見える化する明快な学校ランドデザイン（A 4版1ページ）が欠かせない。

学校ランドデザインは、前年度からバージョンアップを重ねて作成し、そのたびに職員に周知している。また、実際に活動してみると改善点が浮かび上がってくるため、定期的に各担当を含む管理職で改善を試みている。大切なのは、作成したら終わりではなく、常に改善を図ることだと考えている。（現在はVer.4）

■石垣市立伊野田小学校（児童数15名、職員数11名）

① 全教職員参画による学校教育目標見直し

児童や地域の実態を全職員で確認し、「児童に身に付ける力＝児童が必要な力」を焦点化し、学校の方向性を確認した。

学校教育目標の文言については、職員一人一人が学校や児童への思いを伝え合い、「大人」が主語の文言から、「子ども」を主語とした文言に見直した。学校教育目標の文言案は、職員から児童に提案され、修正が図られた。

教育目標は、学校のテーマ詩「伊野田73」に組み込まれ、本校の進む姿として保護者や地域にも発信されている。

② 教育活動の取り組み方や内容の見直し

学校教育目標達成のため、めざす児童像や教職員像を決定した。極小規模校の本校児童は、リーダーの意見に依存する傾向が見られるため、重点目標を「自分で考えて行動し、自分を伸ばす児童の育成」とした。

そこで、各種教育活動の取り組み方や内容を、「子どもが自分で判断し行動できる場があるか」の視点から見直した。子ども主体にするために、活動の多くに異学年縦割り班活動を組み込み、高学年を中心に自分達で考えて行動する場を設けた。見直しにより、各自が、学校の課題を自分事として捉えることにつながっている。

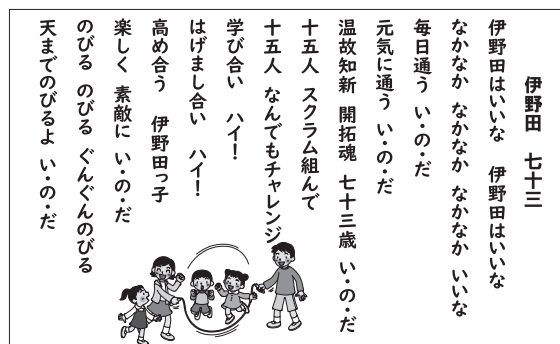


図2 学校のテーマ詩「伊野田73」

■石垣市立大本小学校（児童数7名、職員数9名）

① 目指す「具体的な子どもの姿」と取組内容共有

前年度より1学級増加した今年度は、本務教諭1名以外、校長も含めて入れ替わった職員体制となっている。年度始めに、教育目標で掲げている「育成を目指す児童像」をさらに具体化した目標、また、そのための努力事項となる子どもに身につけさせたい資質や能力・態度について共通確認した。学校経営ビジョンとしての「本校教育目標の具現化構想」を基に作成した学校「ランドデザイン」を全職員に示し共有した。「知・徳・体・郷土」を踏まえて4つ掲げた教育目標の達成に向け、各目標に対応した4つの「目指す子どもの姿」を決定した。

また、どのような取組内容の実践によって育成していくかという繋がりについて「学校経営説明会」を通して保護者・地域の方々と共有を図った。

表1 目指す具体的な子どもの姿と取り組み内容

○目指す「具体的な子どもの姿」と○取り組み内容			
○進んで読書に親しみ、自分の考えを深め表現する子	○地域を愛し、互いに助け合い認め合う心豊かな子	○時間を大切に、規則正しい生活をする子	○健康に気をつけ、進んで運動に親しみ楽しく活動する子
○読書活動の推進	○道徳教育（授業改善）	○ノーチャイムデー（時間前行動）	○体育学習の工夫（めあて学習（合同体育））
○「読み聞かせ」の充実（PTA連年、くにぶんの会10月）	○人権教育の推進（毎月10日人権を考える日）	○生活リズム表の活用（自ら考えて行動できる）	○昼休み時間（30分）の活用
○対話を中心とした学び（合同授業研究（オンライン授業）（交流学習））	○生産活動（農園、菜園、花や野菜の栽培）		○トリム（火・木）8:25～8:45（20分間）の取り組み（一輪車、おもちゃイーター、持久走、行事に合わせて実施。）
○音読の取り組み（音読朝会 音読認定）	○体平和学習、愛鳥の集い、大本マラソン、ジョブシャドウイング、キャリア講話等。読活動		
○各種コンクールへの応募	○児童会・委員会活動（全児童）		

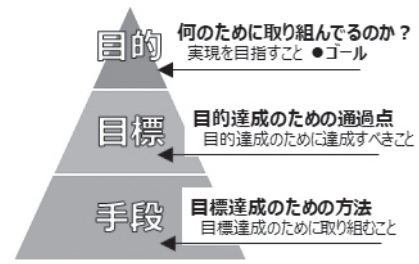


図3 「何のために？」という最上位目標を常に意識

② 「校訓」の共有認識と実践

組織・運営体制づくりで重視したのは、校訓「共に育つ」（師弟同行）を踏まえ、「全員で全児童に関わる」という認識の共有と実践である。極小規模校の本校で、より機能する支援の手立てとその方針を全職員で共通理解し協働体制をつくることが重要であると考えます。校訓に込められた児童育成の思いを継承して機能する組織力を土台に、協働性のある教育実践を目指している。

(2) 学校経営ビジョンに基づく組織・運営

■石垣市立石垣小学校

① 職員のグランドルール（2点）を徹底

- ◇ 手段が目的になっていないかを常に問う
- ◇ 教職員から自律・共生

教職員一人一人に協働意識と当事者意識（自分事）を持たせるために、上記の2点を徹底することを意識した。例えば学校の課題については、学校評価や職員ワークショップ等によって全職員でリスト化して全職員で確認した。その際、それらを学校グランドデザインと照らし合わせ、改善に取りかかる優先順位を見える化し、「すぐ取りかかる」、「検討して取りかかる」、「今年度中に再検討する」に仕分け、すぐに改善できる部分から着手している。

改善策を議論する際、手段や方法を議論すると対立が起きやすく、目的（ゴール）が置き去りになることが往々にして起こる。そのため、校長として「そもそも」を常に意識させている。そうすることによって、やるべきことが明確になり、優先順位を意識するように変化してきている。

また、参画し自分事にするすることで、批判ばかりできない且つ改善案が出やすい、そしてできなかったものは蔑ろにしないという意識が生まれた。

② 対話的ワークショップ導入による心理的安全性向上

まずは教職員自身が「共に育つ」を意識するために、NPO法人「学校の話しよう」の協力支援のもと、「対話的ワークショップ」の場を毎月設定した。コロナ禍でコミュニケーションを図る場が減少する中、定期的な実践値の交流の場を設定することで互いに支え合い、成長する組織の醸成を図った。

【対話テーマ】

- ・ 4月 お互いの持つすばらしさを発見！ 2023年度「はじまり」のインタビュー
- ・ 5月 エピソードを語ることで互いの価値観を知り、実践を振り返ってみよう
- ・ 6月 いいところ共有！学校教育目標（自律・共生）につながった実践
- ・ 7月 1学期の自分のウェルビーイングを振り返ってみよう

■石垣市立伊野田小学校

① 協働を醸成する校務分掌の見える化

極小規模校の教諭は、複式学級を担任しながら教務や研究主任等の校務分掌を複数担い学校組織を機能させている。規模は小さくても、教育活動の企画や調整等は大規模校と変わらないため校務分掌を負担に感じる職員も多い。また、負担に感じる度合いは各々違うため、自分の負担が大きいと訴える職員もいる。

そこで、全職員で個々の校務分掌の負担感や多忙期等を把握し、校務分掌見える化シートを作成した。本シートを元に校務分掌を検討したことで、「いつ、誰が、どのような業務を行っているのか」が明確になり、互いに声を掛け合いながら、見通しを持って校務に取り組む雰囲気醸成された。また、年度当初に、校務分掌は一年間を通して固定するものではなく、状況に応じて変動することを確認したため、不測の事態も連携しながらスムーズに対応できている。

② ビジョンを反映する学級経営案の作成

自己申告書は目標の実現に向けた指標だと考える。そこで、全職員の上位目標を揃え、経験年数や児童の実態・校務分掌等をもとに個人目標を設



定することで協働してビジョンの実現を目指す体制が整った。また、全職員でビジョン実現に向けた内容を検討し、学級経営案（A4版1ページ）に表記することで、学期毎に実施状況を評価し改善が図られるようになった。

教育目標	【学校教育目標】	学び合い ばけまし合い 高め合う 伊野田っ子 <sup>①</sup> <small>知：通んで学び行動する子 徳：明るく思いやりのある子 体：健康でたくましい子 徳土：禮法を守る子</small>						
	【校内研究テーマ】	地域を深く知り、主体的に学ぶという児童の育成 <sup>②</sup>						
在籍	【学級経営目標】 【学級経営方針】							
	計	学年	男	女	学年計	伊野田	笠野	大里
実態	学習面	○ ● ●						
	生活面	○ ● ●						
判定基準	4：100-90 3：89-80 2：79-70 1：69以下							
活動目標の重点	1	『学級PP3方策』まえる <sup>③</sup> 、 学びに向かう集団づくり <sup>④</sup>	①伊野田っ子10の約束の遵守(○=10点とした)平均 <sup>⑤</sup>	○	○	○	○	○
			②長さに目を向け高め合う集団づくり <sup>⑥</sup>	○	○	○	○	○
	2	『学級PP3方策1』目覚め <sup>⑦</sup> 、 「学び育ちの実感」 <sup>⑧</sup> 、 「思い」を持ち主体的に学ぶ授業 <sup>⑨</sup> 、 ・自学自習力の育成 <sup>⑩</sup> 、 ・自律した学習者の育成 <sup>⑪</sup>	③伊野田っ子10の約束の遵守(○=10点とした)平均 <sup>⑫</sup>	○	○	○	○	○
			④単元を見通した授業計画の工夫 <sup>⑬</sup>	○	○	○	○	○
			⑤短い説明や的確な指示で「思い」をうむ授業 <sup>⑭</sup>	○	○	○	○	○
			⑥自分で考え、学びを深める時間の確保 <sup>⑮</sup>	○	○	○	○	○
			⑦「あーいいね うーん えっ おー」が聞こえる授業 <sup>⑯</sup>	○	○	○	○	○
			⑧eライブラリーやICT機器の活用 <sup>⑰</sup>	○	○	○	○	○
			⑨授業における未定着部分の確実な習得 <sup>⑱</sup>	○	○	○	○	○
			⑩「自学計画」実践→ふりかえり「サイクル」の確立 <sup>⑲</sup>	○	○	○	○	○
3	『学級PP3方策3』まえる <sup>⑳</sup> 、 「支持的な風土」 <sup>㉑</sup> 、 石垣市勇気づけの教育 <sup>㉒</sup> 、 「自己肯定感の高まり」 <sup>㉓</sup>	⑪国語算元テストの平均(数値を記入) <sup>㉔</sup>	○	○	○	○	○	
		⑫算数算元テストの平均(数値を記入) <sup>㉕</sup>	○	○	○	○	○	
4	『学級PP3方策3』まえる <sup>㉖</sup> 、 思いやりの心の育成 <sup>㉗</sup>	⑬前向きな言葉をおくり合う学級づくり <sup>㉘</sup>	○	○	○	○	○	
		⑭できるよになった課題を認め合う学級づくり <sup>㉙</sup>	○	○	○	○	○	
5	『学級PP3方策5』つなぐ <sup>㉚</sup> 、 キャリア教育・生徒指導・特別支援 <sup>㉛</sup>	⑮自分で考え行動することをまじむ学級づくり <sup>㉜</sup>	○	○	○	○	○	
		⑯道徳授業の計画的実践と工夫 <sup>㉝</sup>	○	○	○	○	○	
6	『学級PP3方策3』まえる <sup>㉞</sup> 、 健康・安全に関する意識高揚 <sup>㉟</sup>	⑰人権の活用と充実 <sup>㉞</sup>	○	○	○	○	○	
		⑱他者を理解する場の設定 <sup>㉟</sup>	○	○	○	○	○	
7	『学級PP3方策5』つなぐ <sup>㊱</sup> 、 保護者や地域と互恵的関係 <sup>㊲</sup>	⑳自分で決める話し合い活動の支援 <sup>㊰</sup>	○	○	○	○	○	
		㉑生徒指導4ポイントを意識した学級経営 <sup>㊱</sup> (自決意識の醸成、自己存在感、共感的関係、自己決定の場) <sup>㊲</sup>	○	○	○	○	○	
8	『学級PP3方策5』つなぐ <sup>㊳</sup> 、 保護者や地域と互恵的関係 <sup>㊴</sup>	㉒家庭と連携した健康教育 <sup>㊳</sup>	○	○	○	○	○	
		㉓自分の身は自分で守る危機回避能力の育成 <sup>㊴</sup>	○	○	○	○	○	
9	『学級PP3方策5』つなぐ <sup>㊵</sup> 、 保護者や地域と互恵的関係 <sup>㊶</sup>	㉔地域・人権・地域教材の積極的活用 <sup>㊵</sup>	○	○	○	○	○	
		㉕自分の身は自分で守る危機回避能力の育成 <sup>㊶</sup>	○	○	○	○	○	

図4 学級経営案（A4版1ページ）

■石垣市立大本小学校

① 校内研究と学力向上推進の方向性を共有

校内研究や学力向上推進計画の立案では、「学校グランドデザイン」との繋がりを意識していくことを職員に伝えるようにした。様々な学校教育活動を進める上で、児童一人一人に伸ばし培いたい能力を明示しているからである。複式学級3学級の本校は3名が学級の最大人数であり1名のみの学年もある。そのため授業等で同学年の他者との交流における体験を実践できるような校内研究テーマを設定することで、子どもの主体性や教師の創意工夫ある授業計画立案ができつつある。児童が自分の考えを持って他校との交流活動等を行い、それを通して意見・考えの相違や共通認識などを感じながら個々の学びを深めるという方向性を、「学校グランドデザイン」で確認しながら進めている。教師も同様に、交流によって得られた成果を授業改善やICT活用等に生かすことができると考える。

また、重点目標のうち、改善されつつあるものと課題として重点化し、追加したいものが見えてきたため、全職員で共通確認して改善を図っていきたく考えている。

② コミュニケーションを通じた協働体制づくり

本校は、教頭未配置校であり、担任・担任外の校務分掌にかかわらず、各分掌において担う業務が多い。そのため、各自が業務内容をよく把握し、年間を通して見通しを持って業務を進めるためには、職員間で、同僚性を築き相互補助を可能にする協働性のある組織運営が必要であると考え。職員会議や校内研修での情報の共有や、日常におけるコミュニケーションを取り合う関係の重要性の認識を全職員が持つように意識化する取り組みを行い、協働体制づくりを図っている。

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 学校における「ビジョン」がなぜ必要なのか、どのように策定すべきなのかを確認し、小規模校、極小規模校が多い本地区では、学校経営ビジョンの明確化がより一層効果的だとわかった。
- ② 学校教育目標や諸教育活動を「何のために？」と常に最上位目標を意識させて全職員参画で見直したことにより、学校の課題を自分事として捉え、主体的に改善しようとする意識が生まれた。
- ③ 校務分掌が見える化することにより、職員の同僚性が生まれ、協働する意識が醸成された。
- ④ 学校経営ビジョンを基にして「目指す具体的な子どもの姿」を作成し、学校経営説明会で共有することで、保護者や地域とともにベクトルをそろえた児童の育成が図られている。

(2) 課題

- ① 教職員一人一人が自分事として主体的に職務に取り組むため、さらに明確な学校経営ビジョンへ改善を試みたい。
- ② 通常3年だが2年での職員異動もあることを踏まえ、4月1日から全職員が参画意識を高められるよう、前年度中に学校経営ビジョンを策定する必要がある。校長異動の際、新旧校長のビジョンのすり合わせをどうするか。

5 おわりに

「校長だから学校を変えられる！」これは、今年度6月に開催した八重山地区校長研修会での講師（森万喜子氏）からの引用である。

「〇〇すべき」、「〇〇でなければならない」というバイアスにとらわれず、「そもそも…」という本質を常に考えて学校経営ビジョンを明確にしていきたい。

※注① NITS校内研修シリーズ#102「学校ビジョンの理解と共有」浅野良一

## 第3分科会

## 研究主題

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント  
～「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取り組み～

提案者	兼島 栄	(平敷屋小学校)
司会者	新垣 桂	(勝連小学校)
記録者	新城 剛	(南原小学校)
ブロック共同研究者	大庭 真由美	(与那城小学校)
”	平田 治子	(高江洲小学校)
運営委員	仲村 章浩	(奥小学校)

## 1 はじめに

社会の急激な変化に伴い、学校教育においても「持続可能な社会」を実現させるために子ども達に必要な資質能力の育成が求められている。

本研究では、校長のリーダーシップの下、子ども達が、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるように、しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメント「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた、各校の実践を通して探求したい。

## 2 主題設定の理由

現代社会では、インターネットを基盤とする情報化・グローバル化が急速に進み、文化や習慣、価値観が多様化している。今回の学習指導要領では、学校を社会に位置づけ、教育課程の中で、よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有することをねらいとしている。そのために、どのように学び、どのような資質・能力を身に付けるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働により、その実現を図っていくという「社会に開かれた教育課程の実現」が重要だと謳っている。また、社会に開かれた教育課程の「社会」を地域社会と未来社会に捉えることとした。

## 3 研究の視点

研究の視点については、「社会に開かれた教育課程」の在り方を踏まえながら、具体的に考察に取り組みものとする。

- (1) 各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指す視点
- (2) 地域社会・未来社会と繋がる視点

## 4 各校の取り組み実践

- (1) 与那城小学校（児童数472名）

## ① 学校運営と現状

本校は開校83年目、通常15、特支6学級。平成30年より学校運営協議会が設置される。うるま市の多くがオープンスペースの中、本校は全学年が箱型教

室である。担任・専科構成は、本務20名（採用1・基礎3・充実・発展9・指導5）、臨任6名である。

## ② 実践の概要

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組  
「教育目標」「グランドデザイン」の共通理解



写真1：学校説明会

写真2：学校運営協議会

・育成すべき資質・能力の三つの柱の視点から、本校教育目標を解説し、その具現化に向けて各教育活動との一貫性を明確にする。教師・学校運営協議員・保護者・地域、学校に関わる全ての者が理解しうる「グランドデザイン」の形式。  
必要な資質・能力の育成

- 「知識及び学びの習得」—そのために
  - ・全校一斉漢字（モジュール）学習
  - ・授業振り返り・教材研究（学年会）の充実（時間確保のための組織体制の見直し）
- 「思考力、判断力、表現力等の育成」—そのために
  - ・授業改善「論理的思考力を身につけるための学習指導方法の工夫改善～ICTの効果的な活用を通して、経年研授業研究への指導助言
- 「学びに向かう力・人間性の涵養」—そのために
  - ・お話朝会（校長講話）と道徳教育の充実

## 与小合い言葉の実現



笑顔いっぱい花いっぱい歌声いっぱい知恵いっぱい  
いいこといっぱい与那城小

## 地域との連携・協働

- ・コロナ禍明け、復活及び新規に始める活動例



写真3：稲刈り（5年生）

写真4：脱穀（5年生）

学年	内 容	連携・協働機関
1年	鯉のぼり集会 (こども園・保育園と合同)	社協 民生委員協議会
2年	校区探検 昔あそび	保護者 老人会
3年	校区探検 校区内商業施設見学	屋慶名区自治会 商業施設店長
4年	稲作(田植え)体験	稲作コーディネータ
5年	稲作(収穫・脱穀)体験 環境学習(SDGsの視点)	稲作コーディネータ 市行政関係等
6年	地域学習(エイサー) 水難事故防止(着衣泳)	屋慶名青年会 与勝消防署保護者
理科	生命の誕生 星空観察	助産師 教職員OB
音楽	音楽鑑賞(演奏) 音楽部:地域イベント出演 高齢者施設訪問	保護者 地域介護施設等
全	読み聞かせ 不登校児対応 校庭等整備(草刈り・清掃) クラブ活動	PCサークル 屋慶名児童館 地域有志の方々 三線・琉舞
教師	校区探検(教材発掘校内研) 服務規律(校内研)	市学芸員 市教育委員

(2) 南原小学校(児童数270名)

① 学校運営と現状

本校は学級数15、教職員数22名からなる中規模校である。本校の位置するうるま市勝連南風原区は、世界遺産の勝連城のお膝元であり、1区1小で地域との密接な関係性があり、人的・物的にも教育資源に恵まれた地域である。3年前に地域連携が評価され受賞した文部科学大臣賞を励みに連携活動を継続している。

このような環境を生かして、社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、地域コーディネータの積極的活用を含めた特色ある学校経営の充実を図りたい。

② 実践の概要

ア 教育課程編成におけるカリキュラムマネジメントの充実学校デザインシート及び学力向上推進フォーカスシート、学校改善ルーブリックの作成することにより本校で育成する児童像、目指す子ども像、目指す学校像を確認する手段となり、授業改善、学校改善に向けた全職員のベクトルが揃えられ、組織体制で取り組むことができた。

イ 地域社会・未来社会とのつながりによる指導(地域コーディネータの活用)

a 地域コーディネータを活用した地域との連携

昨年までのコロナ禍においても、可能な限り、地域における体験活動を実施し、協力してくれる地域の方の講話等を通し、実感をともなった学びを組織できた。

- 1年生…野菜の収穫(近隣農家訪問)
- 2年生…地域の英雄カッチンパーマー(読み聞かせ)
- 3年生…海から豚がやってきた(中農高校)
- 4年生…勝連城跡見学(あまわりパーク見学)
- 5年生…Rude-αコンサート(「うむい」)
- 6年生…肝高のあまわり公演  
平和サミット・外務省・JICAとの連携
- その他…夏休み勝連城で行ったラジオ体操コンクール企画部門で、総務大臣賞を受賞(NPOの協力)  
放課後子供教室を窓口にした、他県、とのつながり(青森南部町)



写真1:海から豚がやってきた 写真2:南部町長との交流

b 地域理解を深める

本校のある南風原区は勝連城の城下町として、歴史と伝統のある地域であり、それを誇りにしている、地域の方々も多い。長年地域で空手教室を開き、人材育成にかかわってきた方を講師として招き、地域の文化財や、拝所をめぐり、視野を広げた。先人の思いを子ども達にしっかりと受け継がせる思いを共有した。

c 福祉との連携

教福連携は、以前から取り組んできた。これまで、学校、放課後デイサービスと子どもの指導について、十分な相互理解がなされていたとはいいがたい。そこで、地域にある放課後デイサービスと連携し学校職員が夏季休業中にそこで職員と一緒に活動する研修を設け、児童理解、特別支援のスキルを磨くことができた。

(3) 高江洲小学校(児童数688名)

① 学校運営と現状

本校は通常学級23、特別支援学級10、計33学級、教職員58名からなる大規模校である。「和顔愛語」をキャッチコピーにし子どもも大人も学校生活を楽しむ1年にしよう!と取り組んでいるところである。今年度は、創立110年目を迎える。地域とも密接な関係性があり地域や保護者のボランティア活動も盛んである。

② 実践の概要

ア 「カリキュラム・マネジメント」の実現

- a 高江洲っ子の4つの力を育むカリキュラム・マネジメントの推進



今年度より高江洲っ子の4つの力/たくましい心とからだ/かんがえる力/えがおにする力/すすんで行動する力/を育みたい資質・能力としてカリキュラム・マネジメントを進めている。4つの頭文字で「たかえす」とし、日常的に指導と評価の一体化を図っている。同時に昨年度より学校課題（不登校、自己肯定感の低さ）解決のため「笑顔プロジェクト」を実施している。



写真1：高江洲っ子の4つの力 写真2：笑顔プロジェクト

b 校内研修の充実

校内研修のテーマを「たくましい実践力を身につけた心身ともに豊かな子の育成」としサブテーマをSEL&S学習プログラムの実践を通してとし昨年度より取り組んでいる。今年度はSELの学習の時間を「ハピスマタイム」と児童に分かりやすいネーミングにし、学級・学年の実態に応じたプログラムを行っている。また、今年度から校内研修に教師同士の対話による交流「対話の時間」を設け、学校課題解決に向けた意見交換を行い、個々の繋がりやチームとしての協働性の向上を目指している。

イ 地域社会・未来社会と繋がる取り組み

a 自学自習の取り組み

本校では昨年度より自学自習のステップアップ～なりたい自分に向かって毎日コツコツと～に取り組んでいる。自分で考え計画して学習できる児童の育成とともにキャリア形成を促すことをねらいとしている。同時に「赤ペン先生エントリーノート」の取り組みも行い、見本となるノートを掲示し、多くの児童が積極的に取り組む工夫を行っている。

b 地域人材活用、出前授業の実施

地域との繋がりが強く、地域コーディネータを中心に人材の活用を図っている。クラブ活動においては、しまくとうばクラブや短歌クラブ、また、読み聞かせや、漢字検定、校外学習見守り、プール補助等多岐にわたる。出前授業等も積極的に計画し、専門家の講話を通して未来社会と繋がる取り組みを行っている。

(4) 勝連小学校（児童数327名）

① 学校運営と現状

本校は、通常学級17（特別支援学級5つ含む）、通級指導教室（1つ）教職員数37名の中規模校であ

る。うるま市では歴史のある学校で令和4年度創立140周年を迎え伝統や良き校風に恵まれ、大変素直で元気のある子ども達「あいさつ」が自慢である。

② 実践の概要

ア 「社会に開かれた教育課程」の推進写真①

- a 学校の教育目標等…グランドデザインの推進
- b 各教科等の年間指導計画…教育内容の充実
- c 日課表・週時程表・時間割  
…特色ある学校づくり
- d 週案(週指導計画案)…生きて働く教育課程
- e 学校運営協議会の推進…学校経営への参画



写真①わしの子約束

イ 「週時程での工夫改善」

- a 放課後で時間確保ができるような工夫を図る。
- b モジュールを取り入れ、29コマを確保する。
- c 量的・質的な教育課程を推進する工夫



写真②

写真③

ウ 教育課程編成におけるカリキュラム・マネジメント（R⇒P⇒D⇒C⇒A⇒）

- a 「何ができるようになるか」  
⇒一人ひとりの子ども達が、健やかに社会を生き抜く力、基礎学力や人間性を高める。
- b 「何を学ぶか」  
⇒教科・領域など特別活動や道徳を通して（人間関係形成・自己実現・社会参画）を育成する。写真③
- c 「どのように学ぶか」  
⇒年間指導計画をもとに週案の計画的・継続的な効果性のある活用を実施する。
- d 「子ども一人ひとりの発達をどのように支援するか」  
⇒教育相談や子ども理解会議等で関係機関での情報共有を図り対応する写真②

エ 地域社会・未来社会と繋がる支援

- a 読み聞かせボランティア（月2回）
- b おやわしの会（学校有志やOB）
- c 地域コーディネータとの連携等

## (5) 平敷屋小学校（児童数205名）

## ① 学校運営と現状

本校は学級数10、教職員数18名からなる小規模校である。自然や伝統文化等の豊かな教育資源を有する地域であり、創立75年を迎え、地域の方々に支えられながら、恵まれた教育環境が生かされている。

## ② 実践の概要

ア よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有すること。

学校教育目標を「自ら学ぶ子」（生きて働く知識・技能の習得）「思いやりのある子」（思考力・判断力・表現力等の育成）「強くたくましい子」（学びに向かう力・人間性の涵養）とし、学校教育目標に求められる資質能力を関連付けた。知・徳・体 にわたる「生きる力」を子ども達に育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、a 知識及び技能、b 思考力、判断力、表現力等、c 学びに向かう力、人間性等の学習指導要領改訂に示された3つの柱と関連づけながら教育活動を推進していく。

また、これからの社会を創り出していく子ども達に必要な資質・能力が何かを明らかにし、それを学校教育で育成することに関しては、ネット部活の取り組みがある。N高等学校、彩橋小中学校、津堅小中学校、与勝第二中学校、石川中学校、そして本校がネットを介して活動の幅や取り組みの内容を深めていくものである。部員は10名ほどであるが、今後の活躍に期待ができる。



写真①

イ 地域と連携・協働しながら目指すべき学校教育実現すること。

学校経営の基本方針と取り組みの具体的な方向性を示す中で、地域教育素材の活用を通してふるさと・学校への誇りを育てる教育の充実が図られるよう方向性を示した。

具体的には、海から豚がやってきたという戦後の沖縄の食文化を救済した豚を上陸させたホワイトビーチが身近にある。そのホワイトビーチを一望できるタキノーから、歴史を学ぶ機会を設定したり、漁港へ出向き、セリの様子や水揚げされた魚をみたりすることで、地域で行われる営みを体験し、地域のよさや逞しさを学ぶ機会となる。



写真②

また、地域の歴史に詳しい人材を活用し、ゆかりの地について地域探検を行い、歴史的な学習や地域の生活の様子などの学習を深める機会となった。

昨年度と同様に職業人講話としてワーカーズトークを予定している。学校区で活躍する方々の職業観等を学ぶことで、地域に誇りを持ち地域の未来について考える機会とする。

1学年・2学年においては、津堅島へ出向き、津堅島地域の生活や文化等を学び、平敷屋と津堅島の共通点や相違点等を比較しながら、地域を学ぶ機会も予定されている。

## 5 成果と課題（○成果 ●課題）

- 長年受け継がれてきた教育目標の解説を行ったことにより、地域や先輩教師らの思いが脈々と受け継がれていることが分かった。それを確認した上でグラウンドデザインを描いたことで、より教育目標の具現化が見えた。
- 「対話の時間」を設けることで学年を超えた交流でき職員間の協働性の向上が見られる。
- 地域社会との連携により、豊かな体験活動が確保できると同時に、地域社会の構成員としての児童の意識が高まった。
- 特別活動の充実と個人、組織の目標を連鎖させることにより各取組みの方向性が明らかになった。
- 昨年度は授業参観や運動会、学習発表会等、積極的に行いながら活動の範囲を広げていくことができ、地域コーディネータを主に活用しながら連携できた。
- 第一世代交代やコロナ禍の影響により、埋もれた地域力の再生が必要である。
- 地域に対する思いを育む、地域と連携した活動だったが、SDGsの観点など持続可能な社会へ向けの点や取組が十分とは言えない。
- 今年度からの取り組みのため、高江洲っ子の4つの力についての職員の意識に差がある。
- 組織の機能強化を図る取組や社会に開かれた教育課程のさらなる推進が必要である。
- 積極的な連携はこれからと捉える。地域や保護者と連携して子ども達の教育活動の充実を図る必要がある。

## 6 おわりに

これまで新型コロナウイルス感染症に翻弄されてきたが、徐々に緩和され令和5年度からは、日常の学校生活で教育活動を推進することができた。

「社会に開かれた教育課程」の実現では、各成果のもと今後も推進を継続していく。また、さらに地域社会と連携・協働した柔軟なカリキュラム・マネジメントを推進し、新しい時代に求められる健やかな子ども達の育成に全力で努める所存である。

## 第4分科会

### 研究主題

豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

提案者：前川和昭（福嶺小学校）  
 司会者：根間正人（城辺小学校）  
 記録者：大城健（久辺小学校）  
 運営委員：米嵩睦子（漢那小学校）

### 1 はじめに

グローバル化の進展やデジタル技術の絶え間ない技術革新・AIの飛躍的な進歩によるChatGPTの出現、社会構造や価値観の多様化等、現代社会は急速に変化し予測困難な時代になっている。

物質的に豊かな社会になってきている反面、学校においては、いじめや問題行動インターネット上のトラブル、体力の低下等様々な課題がある。このような時代にあって学校教育には、「確かな学力」はもちろんの事、「生きる力」の基盤である豊かな人間性と健やかな体を育む事を、教育活動全体を通して育成していく事が求められている。

### 2 主題設定の理由

急速な情報化やそれによりもたらされた社会構造の変化を生き抜いていく子ども達が、将来より良い人生を送り自分の夢や目標を実現するためには、確かな学力はもちろんのこと、互いを尊重し思いやる心、感動する心などの豊かな人間性、粘り強くたくましく生き抜く健やかな体を育む事が大切である。

そこで本校の児童の実態を踏まえ豊かな人間性と健やかな体作りを推進するため本主題を設定し具体的な取り組みを推進する。

### 3 研究の視点

- (1) 豊かな心を育む教育活動の推進
- (2) 健やかな体を育む教育活動の推進
- (3) 校長の関わり

### 4 研究の実際

#### (1) 宮古島市立福嶺小学校

【児童数12名、学級数4、職員数11名】

本校は、宮古島の最東端にある約2kmの美しい岬。太平洋と東シナ海を一望にできる日本都市公園百景にも選ばれている東平安名崎（ひがしへんなざき）に最も近い学校で、全児童11名の複式3学級・特支1学級の極小規模校である。低中学年児童が行事や総合的な学習の時間、その他の活動に全児童で活動する機会が多い。現在、学校における課題が複雑化・多様化する中、それらの課題を学校だけで解決することは困難

である。そこで、多様な人材を有効活用し、組織として課題の解決を図る「チームとしての学校」そしてキャリア教育を中心としたカリキュラムを展開し、地域の協力の下「魅力ある学校づくり」を展開している。

#### ① 豊かな心を育む教育活動の実践

##### ア 福嶺小IT部の結成

過疎化が進む学校として魅力ある学校づくりこそが今後の学校存続を左右する。と同時にキャリア教育を充実していくことで、自己肯定感の向上、そして豊かな人間性の育成が育まれていくと考える。そこで、児童のICTのスキルアップを目指す中、令和4年度、地域ボランティアの方の協力で福嶺小IT部を結成。ドローン操作を学び東平安名崎でドローン撮影を実施。東平安名崎の過去と現在の様子を比較し天然記念物「天の梅」の保全活動にも取り組んでいる。

また、チャットGPTの学習（自己紹介文の作成）等を行っている。良い点、悪い点も含めて学習。福嶺小学校IT部の活動をSNSで知った全国の方からノートパソコン9台の寄贈が寄せられた。また、Wi-Fi環境を整えるために、地域の方から設備と毎月の通信料の提供を受ける。

保良自治体が8月末に予定している全国各地から応募を募った「ITキャンプin福嶺」の参加者と交流も兼ねてITの学習も実施予定。

これらの活動を通して豊かな人間性を身に付け、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心の育成を図っている。



IT部での様子



ドローン操作を学ぶ



9台のパソコンの寄贈



Wi-Fi環境への感謝状



イ 福嶺小農業プロジェクトの結成

総合的な学習の時間で福嶺小農業プロジェクトチームを結成し、IT部との教科横断的な学習としてソウル大学の講師を招きスマート農業を学び、学校の農園で野菜を栽培し正門で無人販売を行っている。また、リッツカールトン東京のシェフを招き、子ども達が栽培した野菜を使って児童と一緒に調理実習を行った。



スマート農業の講義



全員で野菜作り



シェフと調理実習



野菜の袋詰め



売れ行き絶好調の無人販売機



ウ 全児童で絵本制作し全国出版

児童が「絵本を作りたい」と発したことからはまった「絵本作り隊」1年生から6年生全員が力を合わせ、ストーリー作りから下絵、色ぬり、タブレットを活用した文書作成と、全ての行程を自分たちで行い、Kindle（キンドル）にて電子書籍として全国出版した。

帰国子女が3名（姉妹）在籍していることもあり、日本語と英語訳も絵本に入れ、日本のみならず世界に発信している。

低学年は点描を担当し、高学年は原画をスキャンしタブレット上で文書を作成するなどそれぞれが役割を分担し一冊の絵本の完成となった。



全児童による色塗り



原画が完成



② 健やかな体を育む教育活動の実践

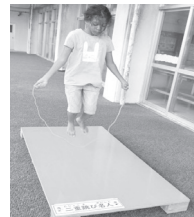
福嶺小学校は、児童数が少ないことからスポーツ系の運動部は結成できない。また、体育の授業でも教科担任制を導入し1年生から6年生が合同で授業を行っている。そのため場の工夫が大切となる。



ボール投げの練習



ロングスローの設置



二重跳び名人ボード



サップ体験

③ 校長の関わり

ア キャリア教育・地域連携・授業改善を重点目標に掲げ全職員・保護者・地域でしっかりと共通理解を行い、教育活動全体を通して取り組む。

イ 地域ボランティアや学校評議員、各区長さん（6名）と学校の課題を把握し改善に向けて話し合い活動の充実。

ウ 全職員が共通認識のもと、魅力ある学校づくりに取り組む。

④ 成果と課題（成果○ 課題●）

○ 地域ボランティアを結成し、地域の協力を頂きながら多くの体験活動を取り入れることができた。またIT部や野菜作りの活動を全児童で行うことで、異年齢の壁を超え協働する力、相手を思いやる心も同時に育成できている。

○ チーム学校（機能する組織体制づくり）

キャリア教育を推進し、全職員が、ベクトルを揃え「めざす子ども像」「めざす学校像」「めざす教師像」に向けて地域一丸となった無理のない組織体制がつけられた。

児童も、地域の協力を感謝し協働で多くの野

菜作りや「絵本作り隊」の結成から全国出版と、学年隔てなくお互いを尊重し、思いやりを持って多くの取り組みに参加するようになった。

○ 場の工夫をすることによって異年齢でも、体育科の目的を揃え体力向上や健やかな体を育む活動ができた。

● 現在の地域ボランティア12名からさらに増員するため全自治会へアプローチし学校経営について説明とさらなる協力体制の依頼をしていく必要がある。

## (2) 宮古島市立 城辺小学校

【児童数67名、学級数8、職員数17名】

本校は宮古島市の東方にあり、城辺地区の中央に位置している。周辺には宮古島市役所城辺支所郵便局・警察派出所・JAおきなわ城辺支店などがある。創立133年の長い歴史を持ち、宮古島市でも歴史のある学校であるが、最近では児童数の減少が著しい。現在は、普通学級が6クラス、特別支援学級が2クラス（知的・情緒）で全児童数は67名の小規模校である。

豊かな人間性と健やかな体作りを推進するため、校長として、小規模校の特性を活かし本校児童の実態を踏まえながら、計画を作成し組織的・協働的に取り組んでいく。

### ① 具体的な取り組み事項の全体共通理解

豊かな人間性と健やかな体を育む取り組みについて、学校評価や各種アンケートから分析し伸ばしたい資質能力を決定し学校全体で取り組んで行くことをランドデザインに整理し全職員で確認、保護者への周知も行う事で、学校・保護者・地域連携して取り組みを行っている。



### ② 豊かな心を育む教育活動の実践

#### ア 異学年交流を通しての縦割り班活動

小規模校のメリットを活かし、全児童で縦割り班を作り、学年をこえた集団で諸活動に取り組む事で、協力して頑張る意欲や思いやりの心を育て、学校生活をより豊かにする事を目的として取り組んでいる。

具体的活動として4月に結成式を行い、4つの班で年間の計画を立て下記の内容を計画的に実施している。



#### 城辺小学校縦割り班活動内容

- |   |      |   |
|---|------|---|
| 1 | 活動日  | 金曜日6校時  |
| 2 | 活動内容 | (1) なかよしクラブ（クラブ活動）<br>(2) 作物植え付け・収穫祭<br>(3) 花いっぱい運動<br>(4) なかよしリレー（運動会） |

活動は話し合い活動を重視し、なるべく子ども達に決定権を与え、教師は取り組み内容のサポートを行うようにしている。異学年の交流を通して上級生が下級生を教えたり、下級生が上級生を敬う場面等も多く見られた。



小規模校は全校児童の人数が少ない分、全体の交流学习に取り組みやすい、というメリットを活かし「縦割り班」といった異学年交流を行っている。この交流を通し異学年で互いを尊重しあい、思いやりの心を育て、豊かな心を育むうえで重要な教育活動になっている。

#### イ キャリア教育の充実

本校では、夢を描き、目標達成に向けて行動できる児童の育成を目指しキャリア教育に取り組んでいる。薬剤師の方や宮古土木事務所の方を招いての講演会や七夕短冊作り校長講話、キャリアパスポート等を通して将来の事について考える学習の機会を持っている。キャリア教育を通して、将来なりたい自分の姿を描き目標に向かって努力していく事と自己肯定感の向上を図っている。



#### ウ 自己肯定感を高める取り組み

○ 子ども達が互いに尊重し、良さを認め合える学級・学校作り

学校評価等で学級の現状を把握し学校生活の全教育活動を通して互いに尊重し合い、良さを認め合う学級集団作り、学校作りに下記の内容で取り組んでいる。

○ 良さを見つける取り組み

小規模校の良さを活かし教育活動全般を通



して全児童の良い所、頑張った事を掲示し全職員での激励・声かけ等を行う。「城辺っ子ハッピーニュース」の掲示では城辺小に関する新聞記事や各種コンクール入賞者を掲示している。先生や友達・保護者からの声かけが子供たちの自信や喜びとなり自己肯定感の向上へとつながっている。（写真①）

○ 努力したことを評価し学級に広げる。

児童の頑張りノートの良かった所を「目指せ頑張り名人」（写真②）で掲示したり、各種児童作品を掲示コーナー（写真③）で全校児童に紹介している。また、帰りの会で児童が頑張った事などを紹介し、学級の児童が1人ひとりの努力にきづくような工夫をしている。（写真④）



写真①

写真②



写真③

写真④

③ 健やかな体を育む教育活動の実践

ア 体育サーキットの設定

日常的に運動に親しむ児童を育成し体力の向上を図るため、体育の時間の前に全学年「体育サーキット」に取り組んでいる。（図1）

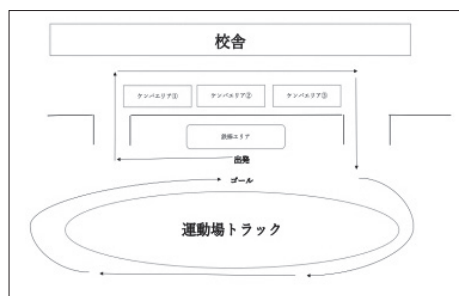


図1 体育サーキット

校庭のケンパーエリアや鉄棒、ラダーなどを利用し、日常的に運動に触れる場作りを行っている。子供たちが興味を持って自主的・意欲的に取り組むよう、校庭に場を設定した事で、体育の準備時間だけでなく、昼休みや休み時間などに子供たちが自主的に取り組む姿をよく見かけるようになった。

また、外遊びを奨励し一輪車や竹馬コーナーを設置しているので、昼休み等には一輪車や竹馬で楽しそうに過ごす児童も多い。このような

環境作りも、支持的風土や健やかな体を育む教育活動の充実につながっている。



イ 徒歩登校の推進

毎月1回「全校一斉徒歩登校日」を設定し、徒歩登校を推奨している。最近は車での送迎が増えてきていたので、日常的に運動に親しむ児童を育成し体力の向上を図るための活動の一環として、徒歩登校を推奨し、学校便り等で保護者への協力依頼をしている。

④ 校長の関わり

ア 学校経営計画の重点目標に設定し、グランドデザインにも位置付け全職員・保護者・地域でしっかりと共通理解を行い、教育活動全体を通して取り組む。

イ 教育計画に年間計画をしっかりと位置付け各主任や関係職員へのアドバイスや助言を行い、協働的で効果的な取り組み・活動になるようにする。

ウ PDCAサイクルで活動に取り組み、全職員でアイデアを出し合い、活動を見直しながら改善を図っていく。

5 成果と課題（成果○ 課題●）

○ 小規模校の特性を活かした、異学年交流（縦割り班）の年間計画を作成し、計画的に取り組む事により、他者を思いやる心や、社会性・協調性・主体性が身についてきた。

○ 意図的な運動の場の設定と、体育の準備時間等に全児童で取り組む事により、日常的に運動に親しませ、体力の向上につながった。

● 豊かな人間性と健やかな体を育むための、地域や家庭との更なる連携・取り組み

6 おわりに

変化のスピードの速い現代社会で、未来をたくましく生き抜くための、豊かな人間性と健やかな体を育むための取り組みは重要であり、教育計画にしっかりと位置付け、学校の取り組みも発信し保護者・地域との連携・協働で育成に努め、校長としてリーダーシップを持ち創意工夫しながら取り組んでいきたい。



## 第5分科会

## 研究主題

学校の教育力を向上させる研究・研修の推進  
～教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修  
体制の充実～

## 1 はじめに

那覇市内には36校の小学校と18校の中学校があり、平成24年度から児童生徒の学びをつなぎ、学校生活へのスムーズな適応に向けて学習指導と生徒指導を柱に小中一貫教育が中学校区ごとに進められている。ただ、小学校と中学校をつなぐためには、自校の教育活動の充実が前提となるため、各校ごとに日々効率的な校内研究や職員研修に取り組んでいる。以下、今年度前半の各校の取り組みの一端を紹介する。

## 2 主題設定の理由

学校の教育力を向上させるためには、当然職員の研究・研修が不可欠である。文部科学省は、教員研修について、「教員は、その職責を遂行するために、絶えず研修に努めなくてはならない」と示している。また、教育基本法第9条においては「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」、教育公務員特例法第21条には「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と示されている。つまり、すでに取組が始まっている令和の日本型学校教育において、教師は、これまで以上に学び続ける存在であることが強く期待されているのである。

このようなことは、校長を始め全ての職員は当然理解しているが、問題は、その職員の研究・研修を行う時間が十分に確保できないということである。学校行事や教育活動の取り組み方や、日課表の見直し等、あらゆる業務の見直し・改善を行っているが、やはり、学校経営の中核となる職員の研究・研修の時間の確保と運営方法どの学校も苦慮しているのが現状である。

そこで、この現状を踏まえ、那覇地区本庁ブロックの小学校7校は、各学校の児童の実態や職員のニーズから校内研究・研修に取り組み、その取組の成果を共有し各校の取組に生かしていくことを確認した。しかし、共通する実践の視点もなく各校の取組を紹介し合っても、自校の実践に取り入れ生かすことは容易ではないことが予想されることから、その拠り所となる考え方を位置付け、実践を推進することにした。

本研究では、取組の拠り所となる考え方を研究の視点として、教師一人一人の指導力及び学校の教育力の向上

提 案 者	：石 川 博 久	(神原小学校)
司 会 者	：島 袋 優	(開南小学校)
”	：新 川 美 紀	(那覇小学校)
記 録 者	：平 良 その子	(天妃小学校)
”	：照 屋 謙 二	(若狭小学校)
ブ ロ ッ ク 共 同 研 究 者	：吉 野 淳	(泊小学校)
”	：金 城 こ ず え	(壺屋小学校)
運 営 委 員	：佐 藤 繁	(辺土名小学校)

に向けて、組織的に取り組む校内研究・研修の充実をめざし、職員が無理なく効率的に継続できる実践を各校で工夫しながら取り組んだ。

## 3 研究の視点

沖縄県教育委員会の教育施策で示されている図1「魅力ある学校づくり」の学びの質を高める授業改善の考え方をめざす実践の考えの拠り所とした。

この考え方は、マズローの欲求五段階説を援用したもので、「安心」「所属」「承認」「自立」の4つの過程を「支持的風土づくりの4つのポイント」としている。安心：安心できる授業・学級・学校づくり、所属：やりがいを持つ授業・学級・学校づくり、承認：認め合える授業・学級・学校づくり、自立：よさを生かして頑張れる授業・学級・学校づくりを意識した実践のことである。このような実践を積み重ねていくことが学びの質を高める学校改善、魅力ある学校づくりにつながるという捉えである。

つまり、教師は先述した支持的風土のある授業・学級・学校づくりに向けて、日々、学校独自の研究・研修を積み重ね、教師一人一人の指導力を高めながら学校全体の教育力の向上を目指すのである。

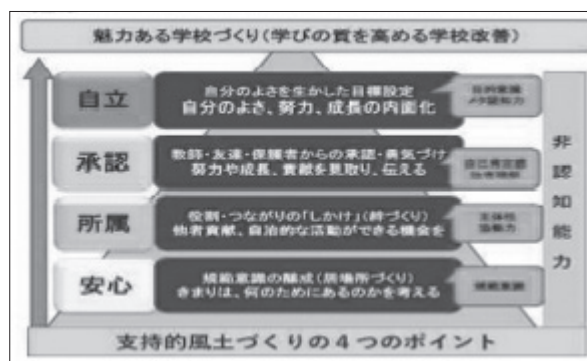


図1【魅力ある学校づくり(学びの質を高める学校改善)】

## 4 研究の実際

## (1) 学校全体で取り組む学級活動

## ① 神原小学校の実践 (児童数 369名)

本校では、児童の実態と教師の困り感から本研究を進めている。教師からは「学級活動は児童の主体性や人間関係づくりができる力を育成するためにはとても重要だとわかっているが、何をどのように進

めていいのかわからない」「準備に時間がかかってしまい、結果として後回しになり計画的に実践できないことが多い」という切実な声が多くあがっていた。

そこで、校長は、4月の理論研で講師となり学級活動(1)(2)(3)の実践の指導のポイントについて共通理解を図った。また、全学級3回の学級活動オリエンテーションを学級担任と一緒にを行い、学校全体が揃って実践ができるようにした。その他、校内研究主任や特別活動主任が中心となり、全学級の当番活動表や学級活動グッズの作成、学級活動コーナーや係活動コーナーの設置等、学級活動の教室環境を整えた。

時間はかかったが、このような準備を学校全体で取り組んだことで、6月から毎週の学年会で学級活動の授業づくりの打ち合わせを行い、相互参観する体制づくりを始めている。これからの教師の指導力の向上と児童の成長が楽しみである。



写真1【学級活動の実践報告と学級活動グッズ作りの様子】

＜教師の振り返り＞

- 教科書のない学級活動であるが、昨年度県指定の研究校であった仲西小学校が作成した『実践イメージ資料』を参考にしながら、学級の実態を踏まえた実践をしている。学校全体で揃えて取り組んでいるので安心してできている。
- 当番活動と係活動の違いをしっかりと確認できたので、児童が主体的に動いている。褒める場面が増えて学級の雰囲気も良くなっている。

② 泊小学校の実践（児童数 726名）

本校では、学年・学級経営の充実に向けて、学習規律や健康安全面・学校生活のきまり等を全体で共通実践を行ってきたが、実際は学年間や学級間の指導に差がみられ、中々定着を図ることができていないことが課題であった。

そこで、その改善策として、週時程を工夫し、毎週金曜日の朝10分間を「学級の日」として位置付け、全校統一した指導に取り組んでいる。内容は学級経営の充実に係ることについて、学校として揃えて取り組みたいことを校務分掌の担当者が資料提供や直接説明をする等、計画的・組織的に実施している。

第1週目は、人権・生活目標について校内放送を行い、担任が補足説明をする。第2・3週目は、学習規律や健康・安全、行事前の事前指導。第4週目は生活アンケートや記名指導を行っている。

校長の関わりとしては学校経営ビジョンを示すとともに、学校経営方針としてその活動の意義や効果を発信することが重要である。また、校長は積極的

に週案コメントや週報連絡等を活用し、教職員の参画意識を高めることが大事だと考える。



写真2【学級の日全校朝会】

＜教師の振り返り＞

- 全学級で共通理解及び共通実践することで、児童がよりよい学校生活を送ることができるようになってきており、学級経営も安定してきたように思える。
- これまでは、職員集会や職員会議等で確認したことを授業時間を使ったり、帰りの会を延長したりして指導していたが、「学級の日」を活用することで、朝の落ちついた中で確認ができてきているため、指導したことが定着していると実感している。
- 学級活動ノートのショートの内容を扱ったり、振り返りを記入させる等の活用ができた。

③ 開南小学校の実践（児童数 406名）

本校の毎朝の児童玄関前の光景として、保護者が子どもを落ち着かせ励まし登校させている姿が多く見られる。児童を観ていると、様々なタイプの他者とおよそ8時間も関わって集団生活をする心のエネルギーは個々で質や量が異なっているように感じる。このような現状に職員が共通認識と解決策で対処しなければ、児童が安心して過ごす学級はつくれず、規範意識の確立や学力向上どころではない。

そこで校長は、学校経営方針の一丁目一番地に「学級経営」を掲げ、職員会議や終礼、校内研、週案へのコメント等で配慮すべき具体策を示している。とりわけ学級活動においては、支持的風土づくりと生徒指導の4つのポイントの実践、各教科で交流活動の実施についてOJT機能を活かして、日頃から研鑽を積み重ね、教師一人一人の指導力を高めながら学校全体の教育力の向上をめざしている。



写真3【国語指導についての校内研究会】

＜教師の振り返り＞

- 校内研の共通実践事項として、教師が意図的、計画的に交流する場面を設定したことで、児童は、互いの共通点や相違点に気づくことができ、友だちの考えを受け入れて、考えが広がったり、深まったりしている。
- 自分の考えを広げ深めるための活動を展開してきたが、その土台としての支持的風土の醸成が不可欠であると思う。



## (2) 学校課題を踏まえた授業研究会

### ① 那覇小学校の実践（児童数 436名）

今年度の校内研修は全員参加の全体研と任意参加のミニ研の2本立てで実施している。教員の資質・指導力向上や授業改善に繋がる研修は必須であるが、多忙な日々の中で追加全体研は日程調整が難しい。そのため個々に欲する学びや経験の異なる教師の困り感や思いを受け止め、必要な時に必要な研修を主体的に実施できる任意参加型のミニ研を校長が4月に提案し取り組んでいる。条件は①30～60分程度の短時間②教科・領域を問わない③校内OJTや外部講師招聘④場所は校内外問わない⑤放課後や長期休業を活用し随時実施⑥全員に周知する等とした。かかわ最初は校長が教師の困り感を受け主導したが、教師の必要時に短時間で研修できるので、授業改善に繋がった実感や、意見交換から学ぶ楽しさや面白さを感じた教員が新たなミニ研を計画して誘い合い、主体的に実施するようになってきた。今後もより主体的な研修が継続するように校長として支援していこうと考えている。



写真4【任意参加のミニ授業研究会の様子】

#### ＜教師の振り返り＞

- 必要に応じて外部から指導主事や外部講師を招聘して少人数で学べるので、より具体的に考えることや質問することができ、授業づくりに活かした。
- 必要に応じて校内OJTを活かして研修できる点、学年を越えて呼びかけて研修できる気軽さがよかった。
- 複数の教科・領域やICT活用授業づくりについて短時間で研修するため、興味のあるものに自由に参加でき主体的に学べ、楽しさや面白さを感じる。

### ② 天妃小学校の実践（児童数 404名）

本校では本年度より主体的・対話的で深い学びに繋げていくための「聞く」「伝える」活動の充実を校内研究として取り組んでいる。児童が「話をしたい」「考えを伝えたい」という視点での課題や発問づくり、児童同士の関わりを意識した場の設定等の手立てに加え、授業づくりの基盤となる支持的風土を高めていく「相手に優しい聞き方のルール」や「グッドリアクション：聞き方あいうえお」の掲示物を活用した取組にも重きを置き、様々な教育活動で日常的に実践していくこととした。

校長は、これらの学級づくりや授業づくりのよい実践内容を学校経営方針である「支持的風土のある学校・学級づくり」と「主体的・対話的で深い学びの授業改善」として価値付け、週案コメントや毎週

の職員集会等で紹介したり、校内研全体研の場で認めたりしている。支持的風土づくりの4つのポイント「安心」「所属」「承認」「自立」を意識した支持的風土のある学級経営の必要性についてもその都度確認している。



写真5【校内授業研究会の様子】

#### ＜教師の振り返り＞

- 教師のモチベーションが高まり、さらに良くしていく手立てを互いに模索する姿が見られるようになってきた。
- 教科専科として他学級の授業も受け持つことがあるが、共通実践として学校全体で取り組んでいることで、指導がしやすい。授業もやりやすくなった。

### ③ 壺屋小学校の実践（児童数 247名）

本校では、昨年度、不登校児童への関りがうまくいかず、学校や保護者全体を巻き込む問題に発展したという現状があった。

そこで、今年度は、児童が安心して学校生活が送れるよう、学校組織の体制見直しや研修の充実、支持的風土づくりに取り組んでいる。いじめの未然防止は支持的風土づくりが重要である。「壺屋っ子ニコニコ7」（学習規律）、自分も相手も大切にする言葉遣い、生徒指導の4つのポイントを意識した授業等、教職員が同じベクトルで共通実践を行っている。研修においては「不登校・いじめ・保護者対応」「支持的風土ある学級づくり」等を実施し指導主事から指導を受け、職員の指導力・資質向上に努めている。また、校長としても次の事に取り組み、児童や保護者、職員との信頼関係を築き、皆が輝ける支持的風土ある学校の構築を目指している。

- ・学校生活や先生方への不安等が書ける全児童対象の「校長先生へのお手紙」を実施しメッセージを記載し、気になる児童とは面談
- ・学校だよりを月2回発行
- ・週案への励ましや感謝メッセージの添付
- ・「学習規律」についての講話



写真6【学級づくりの方策を共有する様子】



## ＜教師の振り返り＞

- 「支持的風土のある学級づくり」の研修で参考になる取り組みがたくさんあった。早速実践したい。
- 学習規律や学習環境など同じベクトルで共通実践することで、指導が身に付きやすい。
- 小中一貫教育の取り組み「学級活動」については今後、力を入れて取り組んでいきたい。

## (3) 自己指導能力を育む生徒指導体制の構築

## ① 若狭小学校（児童数 287名）

本校では、落ち着いた雰囲気の中で安心して学習に取り組めるよう、一部児童への個別対応を行うなど、生徒指導上の課題に対する組織的な取り組みを図る必要があった。

そこで校長は、年度当初に学習規律の定着と自己指導能力の育成について、全職員で共通理解を図った。また、校内研修において「個別支援」と「集団指導」の必要性を確認し、個に応じた助言や支援を行うことと、児童が互いの特性等を理解し合い助け合って共に伸びていこうとする集団づくりを実践することを確認した。

さらに、一貫した指導方針で対応するとともに各職員の役割や持ち味を生かした指導、協働による問題行動の早期発見と校内児童支援体制の充実を重点に取り組んだ。



写真7 【「個別支援」と「集団指導」の必要性を確認する様子】

## ＜教師の振り返り＞

- 問題行動への対処を行う際に、教師主導で課題や改善策を示すのではなく、児童自らが落ち着いて「何が問題だったのか」「どうすれば良かったのか」を考えさせ、自己指導能力を高める指導を心がけることができました。また、今後うまく対処できないことがあっても教師がカバー（手助け）していくことを確認したことで、日々の生活が落ち着いてきている。
- 「若狭っ子応援ルーム」を活用し、短期目標と長期目標を設定して段階的な指導支援を行うことで、学級担任や校内自立支援員をはじめ多くの職員から励ましを受けることができ、登校日が増えてきている。

このような取組過程において校長は、職員の関わり方と児童の変容等について支援と激励を行い教師の教育力を向上させる実践研究を継続していく。

## 5 成果と課題

成果として、各校の児童及び職員の実態を踏まえた組織的な研究・研修の実践は、教師の安心とやりがい、日々の授業改善やよりよい生徒指導等に繋がっていることがあげられた。そういう意味では、本グループが研究の視点とした沖縄県教育委員会の教育施策「魅力ある学校づくり」の学びの質を高める授業改善の考え方をめざす実践の考えを抛り所としたことは、妥当であったのではないかと考える。

一方、課題としては、どの学校も業務多忙な中、限られた時間において、研究・研修を行っているが、計画的に取り組める時間の確保が十分ではないことがあげられる。今後も各校においては職員研修をさらに効率的、組織的に取り組める工夫をするとともに、職員研修の在り方について校長会でも繰り返し話し合い、業務改善に努め、日課表の見直し等も行いながら研究・研修の時間の確保を行っていきたい。

## 6 おわりに

本グループの研究の成果と課題を踏まえ、現時点で明らかになったことと、今後意識して取り組んでいくことについて述べる。

校長は自校の教育力の向上に向けて、職員が取り組む実践の明確な見通しとその目的を示し、職員のやるべきことと、めざす児童の姿のイメージを共有し職員が安心して取り組めるようにすることが大切である。また、職員が業務を進めていく上での困り感に耳を傾けることが大切である。その際、取組を進めながら課題の解決策について職員の考えを取り入れ、学校全体で無理なく継続でき、効率的にできる方法・内容を考え取り組んでいく必要がある。

予測困難な時代、VUCA（ブーカ：激動、不確実、複雑、曖昧）の時代と言われている今、児童には学校が楽しい、仲間と一緒にだと嬉しいという体験だけでなく、自分の力で、自分たちの力で課題解決できる資質・能力を身に付けさせなければならない。そのためには、我々教職員こそが指導力を高めるための雰囲気をづくり、校長のリーダーシップのもと個別で自己研鑽し、チームで協働的に学び続けていくことが重要なのである。

## 第6分科会

## 研究主題

これからの学校を担うリーダーの育成  
～学校教育への確かな展望をもち、行動できる  
ミドルリーダーの育成～

## 1 はじめに

デジタル技術の飛躍的進歩やコロナ禍による日常生活への影響など社会が劇的に変化中、学校教育においては、Society5.0（超スマート社会）を生き抜く児童の育成に向け、学校ver.3.0（「学び」の時代）の展開による持続可能な「魅力ある学校づくり」が求められている。これらを推進するには、教職員一人一人の力を高め、学校組織としての教育力を向上させる必要があり、校長のリーダーシップの下、学校の中核を担うミドルリーダーの育成が急務となっている。

## 2 主題設定の理由

令和4年度本研究大会要録（第6分科会）において、各地区から「人事配置や組織編制・人材育成等」16の課題が示された。そこで、本研究では、学校教育への確かな展望をもち、行動できる、ミドルリーダーの育成に向けた校長の役割と指導性、校務分掌の機能化に向けたリーダー育成について、本地区公立小学校（離島含）45校の校長44名を対象にアンケートを実施し実態把握するとともに、各学校の特色ある取り組みを挙げ、ミドルリーダー育成に向けての方策を探っていききたい。

## 3 研究の視点

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況の把握
- (2) 各学校の特色ある取り組み

## 4 研究の実際

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況の把握

本地区における、ミドルリーダー育成実態を把握するために本地区公立小学校（離島含）45校の校長を対象にアンケートを実施した。

表1：ミドルリーダーの育成について（R57月実施）

有効な取組	育成を視点とした校務分掌配置	75.0
	評価面談での指導・助言・激励	18.2
	三役（四役）会議等での指導助言	6.8
	その他	
	○資質・能力に応じた校務分掌配置と研修受講の奨励 ○校内OJTの活性化 ○長期研修への参加と他校教職員との交流や、自己研鑽	

提案者	：上原千秋（上田小学校）
司会者	：島袋成良（北丘小学校）
記録者	：慶田盛元（佐敷小学校）
”	：大城圭（新城小学校）
運営委員	：比嘉悟（大宮小学校）

課題	行政：研修受講者の採用枠を広げる。人事配置 校長：ミドルリーダー像の明確化・育成の場の設定、 適材適所に考慮した校務分掌配置 職員：ミドルリーダーとしての意識向上、学校運営の 参画意識
必要事項	・行政と連携した意図的・計画的な人材育成 ・同僚性の構築（OJTの推進） ・参画意識の向上と自ら学び続ける教師支援 ・自己肯定感が高まるような声かけ等

ミドルリーダーを育成する際、有効な取組として、校務分掌配置が7割以上を占めている。しかし、学級担任制で授業時数も多く、また、専科配置も少ない小学校では、学校課題に対する人事配置が重要である。更に、各ステージにあった資質能力の育成を視野にいられた計画的な人材育成は、校長の積極的リーダーシップを生かす組織体制づくりの要である。

そこで、本地区の令和5年度本務教諭（管理職・事務職を除く）の年代別構成、育成指標ステージ別構成について配置状況の把握を行った（表2・3）。

表2：年代別構成（管理職等を除く本務教員）

年代	人数	比率%
20代	153	16.6
30代	273	29.6
40代	272	29.5
50代	181	19.6
60代(再雇用含む)	43 (29)	4.7

表3：県育成指標ステージ別構成（管理職等を除く本務教員）

ステージ	人数	比率%
採用ステージ（1年目）	59	6.4
基礎ステージ（3年目前後）	152	16.5
充実ステージ（8年目前後）	211	22.9
発展ステージ（13年目前後）	248	26.9
指導ステージ（18年目前後）	252	27.3

本務教諭の平均年齢は表2から36.6歳となり、30代40代が約60%を占める。また、県育成指標ステージでは、ミドルリーダーとして活躍が期待される充実・発展ステージが約半数を占めていることから全体的に地区内の年代別構成は、バランスよく配置されているように見える。しかし、本地区は学級数が5学級以下の離島校や、本島内においても在籍児童7名4学級の小規模校から1,038名41学級の大規模校と、全45校における教員の配置状況の差は大きい。さらに初任者配置

校は、毎年校内指導員として発展・指導ステージに該当する教員数の確保は必須となる。そして、初任者研修を終え基礎ステージとなる教諭の育成は、次期ミドルリーダーとしての資質向上に向け取り組まなければならない。また、離島校の多い本地区では、経験の浅い教員にリーダー的役割を担わせなければならない状況もあることから、各ステージに合わせた資質向上が必要である。

以上のことから、校長は、職員一人一人に指導期までの自分像を具体的に描けるよう働きかけるとともに、各ステージにあった指導や助言、更に研修等を計画的に進めるような校務分掌の配置、評価面談の活用、行政への働きかけ等、人材育成の手立てが必要である。

## (2) 各学校の特色ある取り組み

### 豊見城市立上田小学校（児童901名教職員64名）

本校は市街地に位置し、校区も広く児童数が千名を超える大規模校であったが、2015年にゆたか小学校が新設され、分離に伴い児童数は減少した。

しかし、その翌年から年々児童数は増加し、今年度900名を超えた大規模校となり、学級数・職員数（表4）も併せて増加している。

表4 育成指標ステージ別構成（管理職等を除く本務教員）

ステージ	人数	比率%
採用ステージ（1年目）	3	8
基礎ステージ（3年目前後）	6	16
充実ステージ（8年目前後）	9	24
発展ステージ（13年目前後）	10	26
指導ステージ（18年目前後）	10	26

このような大規模校で安心・安全で魅力ある学校づくりを推進する為には、校長のリーダーシップと共にミドルリーダーの育成が必須となる。チーム学校を推進するため、校長は学校課題を児童・保護者・教員・地域等の評価資料やアンケート、子ども達の実態から「育てたい子どもの姿」を明らかにし、学校経営の核を設定する。そしてこれらを組織で取り組むため、学校経営への参画について、具体的に且つ、分かりやすく繰り返し提示することが大切である。その中で、校長は、学校経営の要となる人材発掘と、その育成プランを早期に立て、次年度を見越した働きかけを計画的に進める事が必要であると考え、次のように取り組んだ。

#### ① 授業観察と人材理解（4月）

「教師は授業で勝負」と言われることから校長は、教職員の校内OJTで活かせる授業力、特に授業づくりや学級経営状況を丁寧に見取り、さらに学校経営の参画意識や受けもつ校務分掌への計画的な取り組み（P提案・D実施・C評価・A改善）の視点が持っているか等を、こまめに観察し、個々の能力を把握する。

#### ② 評価面談と育成プランの提示（5月～7月）

当初面談で個々の目標を確認し、助言の中で、学校教育目標の具現化に向けた参画（個々の役割）について提示する。更に各ステージでどのような教員を目指しているのかを意識させることで、修養の必要性を高める。

#### ③ 校務分掌の配置（8月～）

専門性や教育活動への参画意識と、調整・連携力を総合的に判断し、次年度学校経営の要となる、教務主任・特別活動主任・校内研究主任・学年主任に配置したい職員と面談を行った。その際、校長は学校経営ビジョンを具体的に示し、チーム学校の要としての役割や、校内OJTを活性化について提示し、ミドルリーダーの育成を軸とした校務分掌配置を下記のとおり取り組んでいる。

##### ア 40代充実ステージA教諭の育成（教務主任）

A教諭は、これまで特別支援学級・6年担任（教育相談）を担当し、児童・保護者・教職員を繋ぐ調整力に優れている。また、教育活動全体を見渡し対応することができる人材である。中間面談では、次年度の学校経営ビジョンを説明し、教務として学校経営への参画について意見交流を行った。また、業務の引継も計画的に取り組むよう助言することで、年度末・新年度の教務担当以外の業務も滞りなく推進され、チーム学校・OJTの要である。

##### イ 40代発展ステージB教諭の育成（研究主任）

B教諭は学年・学級経営力に優れ、授業づくり等真摯に取り組む、昨年は校内研代表授業者として研究を推進した。その経験とB教諭の強みである英語指導力を活かすため、中間面談では次年度の学校経営ビジョンを説明し、英語専科・研究主任として参画することを提案した。このように前以て準備を進めるよう助言したことで、今年度の校内研究は計画的に推進されている。

##### ウ 30代充実ステージC教諭の育成（特活主任）

C教諭は6学年担任で授業力・学級経営力に秀でており、率先垂範の態度は職員へも良い刺激となっている。そこで前任の離島校での経験を生かし、児童会活動の活性化について次年度の学校経営ビジョンの説明と取組を提案し今年度の実践に繋いだ。現在、主体的な児童会活動が活性化され、上田っ子の良さとチーム学校が展開されている。



図1：児童会「思いやりの輪」遠足と縦割班活動



## 南城市立佐敷小学校（児童432名、教職員37名）

本校は、学級数が2～3学級の適正規模の学校である。本校職員構成として、9年目までの職員が37%となっている。今年度は、初任者研修の配置がなく、基礎ステージから指導ステージまでの職員がバランスよく配置されている。そのバランスのよさを生かした職員の育成を行い、そのステージに応じた力量をつけていくことが、教職員全体の力量を高めることにつながると考え取り組んでいる。ひいては、その職員が学校運営を推進していく人材となり、より自覚化されたミドルリーダーの育成となっていくであろう。

その主な取り組みについて、紹介していく。

## ① プロジェクト部会の取り組み

教職員を、チーム「知」・「徳」・「体」の3チームに分け、学期に2回部会を持ち「取り組みとその方策」「取り組み状況と課題」について話し合いを持っている。例えば、チーム「知」は学推・校内研・波多江（姉妹校との交流）・図書・幼小連携・キャリア・特支の構成となっており、各担当より報告を行い、各担当から各部との連携や職員へ周知等を行っている。指標ステージが、異なる職員が校長の学校経営方針をもとに、各校務分掌の取り組み状況を報告し話し合うことで、取り組みや課題について自分事として捉え、考え合うことで職員の協働により学校運営に参画していくことができる体制をとっている。

各部会の話し合い内容については、教務主任へ報告し、教頭・校長へと職員からのボトムアップとしている。

## ② 校務分掌の配置と評価システムの活用

プロジェクト部会を活性化しているためには、各校務分掌の配置を重要となってくる。それには、評価システムを活用し、面談で学習指導や校務分掌に対する目標や取り組みについて、校長の学校経営との整合性や目標を共有化し、職員の取り組みへの称賛と自主性を重要視しやる気を喚起させていく。

## ③ 教職員一人ひとりの特性の把握

適材適所への人材の配置をするためには、職員個々の特性を捉えることが大切となってくる。その特性を見極め、得意分野を捉えるためには、日頃の授業観察や評価面談等を大切にしている。職員が得意なことだけでなく、本人が気づいていないが向いていることへのサジェスションを行っている。また、育成指標ステージに応じて、OJTや研修等の方策を行っている。

## ④ 具体的な取り組みへの評価

校務分掌等、責任をもって取り組んでいることに対し、職員会議や終礼、企画委員会、児童支援委員会、4役会、週案、校長だより等を通して、評価・激励し職員のやる気が持続して取り組めるようにし、全体への周知を図っている。

## 八重瀬町立新城小学校（児童351名、教職員31名）

本校は農村地域の学校として、1学年1学級の児童数150名程度の小規模校であったが、近年、住宅地の造成や交通網の整備が進み、さらには町村合併に伴う通学区の変更等もあり、児童数が毎年20～30名の増加し、それに伴い学級数、職員数も増加し続けている状況である。本務職員15名の育成ステージ別構成は、初任者の配置は無く、採用9年目までの充実ステージの職員が最多の40%、次いで発展ステージ33%で、中堅教諭等資質向上研修前後の職員が中心でバランスは良い。職員構成の中心である充実・発展ステージの職員の学校経営への参画意識を高め、ミドルリーダーの育成をめざし下記の取組を推進している。

## ① 校内研究を核とした各研究部会の取組

今年度、文科省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」研究の2年次であり、校内研究の研究体制を、全職員で構成する全体会の他、低学年部・中学年部・高学年部・特別支援教育部の4研究部会に細分化し、各部会で指導案を作成し、全職員必須で検証授業、または研究授業の授業者として校内研究に参画する体制になっている。校内研究に主体的に参画することで理論研究を基盤にした授業力も高まり、協働的な取組を通してさらなる授業力の向上も図られている。学級・学年経営の充実を通して、全職員の学校経営ビジョンへの理解と参画意識の高揚に繋がっている。

## ② 適材適所を意識した校務分掌

ミドルリーダー育成において、適材適所による校務分掌の配置と、当該分掌の役割達成感が重要。

ア 教務主任：校長の経営ビジョンの具現化を教頭とともに推進している。教務主任には学校運営を通して得られる充実感や喜びを適宜紹介し、教務としての役割を賞賛するとともに、管理職を目指す意識の高揚を図っている。

イ 学年主任：前述①の校内研究の取組に係る各研究部会の中心的な役割となっている。発展ステージ職員を中心に配置し、臨任及び基礎・充実ステージ職員のサポートや助言等を通して、授業力や学級経営力の向上を実感させ、今後のミドルリーダー育成に繋げている。

ウ 研究主任：文科省指定研究に係り、本校における研究主任の役割はきわめて重要であり、当初、発展・指導ステージ職員の配置を検討したが、限られた職員数を勘案し充実ステージの職員を配置している。研究熱心な職員の抜擢等、個々の職員の適性や強み等を考慮し校務分掌を配置し、ミドルリーダー育成に繋げている。

## ③ 教職員評価システムや授業観察の活用

評価システムの面談において、校長が示す経営ビ

ジョンや上位目標に準じた具体的な目標や進捗を確認し、指導助言や激励を通して教職員の意欲を高め、学校経営への参画意識を高めている。

#### 南風原町立北丘小学校（児童927名、教職員65名）

本校は、毎年3名の初任者が配置され、9年目までの職員で、本務の53%を占めている。発展ステージ、指導ステージの職員の力量を活用し、職員全体の力量を高めることが喫緊の課題となっている。

##### ① 校務分掌を生かしたミドルリーダーの育成

対象の教員一人一人の適性を考え、それぞれが活躍できるように、責任者の立場を与えた。学校全体のことを考えて企画立案を行ったり、校外の人や機関と連携したりする経験を積ませることが目的である。また、目標達成のために誰をどう動かすかといった、人を動かすことを学ばせたいと考えた。

##### ア 教務主任

4役会の場合はもちろん、普段から校長の学校経営などについて話す機会を多く持つ。教頭の監督の下、OJTとして、服務管理や実務処理を含めた学校事務管理の基本を学ばせ、校務運営全体の進行管理をする能力を学ばせていく。

##### イ 生徒指導主任、教育相談担当等

問題行動や不登校児童への対応において担任・保護者とともに児童理解を深める。同時に、関係機関と連携することで、リーダーとしての組織的・意図的連絡調整能力を育成する。

##### ウ 学年主任

学年経営の中心的な役割として、学年の学習活動や行事等に主体的に関わる。主任としての企画立案・連絡調整・指導助言等を通してリーダーとしての資質と自信を育成している。

##### ② 専門性を生かしたミドルリーダーの育成

教師個々の得意分野（教科、学校経営等）を見だし、それを発展的に育成し、学年や学校全体でその専門性を活用させることで、自分自身の自信につなげながら職能を高めさせている。また初任者等に向けた示範授業や講話等を実践することを通して、授業力や責任感等も高まっている。

##### ③ 評価システムを通したミドルリーダーの育成

管理職との評価システムの面談において、目標指標等も活用し具体的な目標を意識させること、またその進捗状況を確認するなどして、意見交換や指導助言を行い、責任感ややる気を喚起する。

##### ④ 研修の充実によるリーダー育成

日常業務を通したOJT、OFF-JT、自己啓発等の方策を講じる。また、経験年数別研修等と関連付けながら教員等の資質能力の向上を図る。あわせて積極的に長期研修を薦めていく。研究主任や学推主任

は、研究計画や推進計画の作成・推進をすることで、本人並びに職員の力量も高まっている。

##### ⑤ 週案簿等への助言等によるリーダー育成

資料の提供や今週の行事の反省・ねらい、授業の感想等全体にかかわるようなコメントで「方向性」や「やる気」を喚起する。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- 学校経営に職員が参画できるよう、学校経営方針を明確にし、校務分掌に合わせ教職員を適材適所に配置し指導・助言することで、リーダー育成に繋がっている。
- 教職員評価システムを目標管理に関わる面談として活用することで、意見交換や助言等を効果的に行えた。
- 各主任が学校の重要課題を理解し、学年経営や授業づくりに関連付けることで、より主体的・組織的に取組むようになった。
- 年1回以上の研究授業と日常的な相互授業参観は、学校教育目標の具現化に向けた、ベクトルのそろった授業改善へと繋がった。

### (2) 課題

- ・組織的な取り組みを進めるための日課の工夫や、カリキュラムマネジメントの運用。
- ・人材育成と学校規模に合わせた人事配置（ミドルリーダーとなり得る年齢層）

## 6 おわりに

次代を担う子ども達の育成において、学校教育の果たすべき役割は大きなものがあり、複雑化・多様化した課題や新しい時代の教育への対応等が求められている。

「教育は人なり」と言われるように、本県では教育の直接の担い手である教員の資質能力の向上を図ることを重視した「沖縄県公立学校教員等育成指標」において、教員一人一人が資質能力の向上を図り、チーム学校の一員として自らの強み、特性、キャリアステージ等に応じて活躍し、互いに連携・協働する人材が求められている。その中でも、確かな知識・技能と幅広い視野を持つ経験豊かな教員と新たな時代に対応する感性や柔軟性を備えた若手教員、そしてその両者を結び付け、教育活動を力強く推進するミドルリーダーとしての中堅教員とが互いに学び合い、連携・協働することは肝要である。そこで、校長は、学校の活性化に向けた教員の資質の発見と育成に努め、個々の教員が適材適所でやりがいをもって働くことができるよう連携・協働体制を構築し、リーダーシップを発揮していきたい。

## 第7分科会

### 研究主題

命を守る安全教育・防災教育の推進並びに様々な危機への対応

提案者：大城 仁美（具志頭小学校）  
 司会者：平 良 真也（長嶺小学校）  
 記録者：瑞慶覧 長 洋（津嘉山小学校）  
 ”：上江洲 学（糸満南小学校）  
 運営委員：崎 山 和 史（安田小学校）

### 1 はじめに

安全・安心な学校経営は学校の最重要課題であり、生徒の学習成果や教職員の働きやすさに大きな影響を与える。本研究では、安全・安心な学校経営を実現するための具体的な教育実践や教職員研修等の取り組みを提案する。これらの提案が、児童と教職員の安全性と安心感の向上に貢献することを期待する。

### 2 主題設定の理由

昨今、日本各地では大きな地震の連動発生や自然災害がもたらす被害が一段と危惧されている。また、学校においては、いじめ問題が深刻化するとともに、不審者犯罪や交通事故等の子どもが被害者となる事件・事故の発生など、児童を取り巻く危機的状況は深刻さを増している。沖縄県においては、精神疾患により休職する教職員の増加も大きな課題となっている。

こうした現状において、学校では、安全に関わる知識、危険予測・回避能力等を児童に育てていく安全教育の取り組みや、教職員の危機管理能力の向上、教職員が安心して働ける職場環境づくりなど、様々な危機への対応が求められている。

そこで、本研究では、各学校の実践事例から、事件・事故及び災害時を想定した具体的な取り組みや、教職員の危機管理能力の向上、安心な職場環境づくりの取り組みなどを共有し、児童及び教職員にとって安全・安心な学校づくりを目指した。

### 3 研究の視点

- (1) 安全教育・防災教育に実際
- (2) 保護者・関係機関の連携
- (3) 災害時の緊急対応
- (4) 職場環境づくり

### 4 研究の実際

- (1) 八重瀬町立具志頭小学校の実践（児童数483名）  
 本校は開校143年目を迎える歴史ある学校である。校舎は高台に建っており、津波等における災害時の避難場所となっている。また、校区内には海や河川があり、地域教材として魅力がある反面、水難事故などの危険がある。更に最近では、スマホやタブレット

の普及に伴い生活習慣の乱れや様々なトラブルが発生している。

そこで、日頃から「自分の身は自分で守る」という意識を待たせ、下記の実践を行った。

#### ① 専門機関と連携した避難訓練

1学期の不審者避難訓練においては、児童だけでなく、職員の動きについて糸満警察署員の協力をもらいながら実施した。児童へは不審者から自分の身を守ることについて講話をしてもらい、職員へは不審者への対応や臨機応変な対応についての助言をもらうことができた。

3学期の火災訓練では、消防署員から発生時の初期対応や避難経路についてだけでなく、校長としての役割として職員全員の安全確保について助言をいただいた。



#### ② 着衣水泳と救命講習

6年生において着衣水泳を水泳学習の最後に実施した。消防署員7名の講師が来校し、自分の命を守る方法としてペットボトルの活用や水難事故から自分の命を守ることについて実習と講話を実施した。また、「離岸流」についても説





明があり、水難事故の危険性について学ぶことができた。

職員については、水泳学習の事前研修として心肺蘇生法とAEDの使用方法について実技講習を行った。安全な水泳学習を進める上で毎年行っている。

③ サイバー犯罪講習会

低学年「いじめ・万引き防止」、中・高学年「ケイタイ・ネットを安全につかおう」をテーマに3回に分けて警察署員による講話を実施した。発達段階に合わせ、それぞれの主なトラブルにわたせた内容となり、児童も真剣に話を聞いていた。

この講習は前年度の反省や児童の課題から計画的に進めることができた。



④ 集会による安全教育

年度スタートには「安全・安心な学校づくり」について校長講話を実施、その後、学年集会での確認と学級指導を行い、取組の徹底を図った。5月には、生徒指導主任による講話で振り返りを行い、学校全体で共通実践を確認し取組の強化を行った。7月には水難事故防止や交通安全、校内での事故防止について校長講話を行い、「自分の身は自分で守る」ことについて意識の継続化を図っている。



(2) 南風原町立津嘉山小学校の実践（児童数986名）

津嘉山小学校では児童の危機回避能力を育成するため、自ら危険を予測し、回避する能力を育成するための視点として「予測」「回避」「主体性」をキーワードに各取り組みを展開している。

① 日々の安全教育の取り組み

ア. 校内安全点検の実施

毎月はじめに安全点検を実施し施設の点検・修理を行っている。

イ. 地域、PTAと連携した朝の交通安全見守り

PTAが中心となり、保護者の輪番制による交通安全見守り活動を実施している。校区内4つのポイントをクラスごと1週間交代で参加できる日に協力をお願いしている。また、週1日は町老人会による下校時のパトロールの協力を得ている。



ウ. 交通安全指導の教材情報の提供

PTA地域安全部会のLINEを利用し、「交通安全のビデオ」「交通安全のうた」、NHK for Schoolの「子どもの安全リアルストーリー」等を紹介し、家庭で児童への指導の際の資料提供を行っている。

エ. 交通安全教室

新入生に向けて与那原警察署より、横断道の渡り方や不審者対応について講話を実施している。



オ. 非行防止教室

2年生以上の学年で与那原警察署の協力を得て、スマートホンの使い方や、個人情報管理についての講話指導を行っている。

カ. 校内緊急対応マニュアルの整備

プール学習前に島尻消防の協力を得て、全職員対応で心肺蘇生法、AEDの使用方法について講習会を実施している。

キ. 慢性疾患児への対応（心疾患や食物アレルギー）

慢性疾患児について全職員への共有と状態悪化の際の緊急対応フロアチャートの整備

ク. 不審者対応訓練、地震・火災避難訓練の実施

6月 不審者対応訓練

11月 火災訓練又は地震訓練（隔年で実施）

② 校長としての係わり

ア. 安心安全な学校づくり

年度当初の学校経営方針の中で児童が安全に学習に取り組める環境づくりに取り組む事を念頭に、「危険を予測し回避する能力の育成」を基本におき、学校、家庭、地域が協同

し安心して登校できる学校づくりを目指すことを明確に打ち出す。

イ 児童の様子を各担任や養護教諭等と情報交換を密にし、安全指導体制づくりに努める。

### (3) 糸満市立糸満南小学校の実践（児童数820名）

開校66年目を迎え、開校当時の場所（海拔28m）から現在の潮崎町（埋立地・海拔3m）に移転したのが12年前。当時は500名余りの児童数であったが、現在は児童数820名の規模になっている。移転したその年の3月に「東日本大震災」が起き、津波の脅威を目のあたりにした。避難等の課題については今も議論が続いている。

#### ① 「地震・津波避難訓練」

現在避難場所になっているロンドン杜公園は、本校から約1km程離れた高台で、避難経路の途中には国号331号線を横断しないと行けない箇所がある。コロナ禍に於いて過去3年間全校一斉での「地震・津波避難訓練」を行っておらず、3年の間には職員も大半が入れ替わり以前の避難の状況を把握している職員がいなかった。そこで、地域防災マネージャー賀数淳氏を招聘し教師向けの地震津波に関する研修会を実施した。その際、避難経路になっている国道331号線を800名余りの児童が横断することは現実的ではないことを確認した。訓練では全校児童・職員が国道までの避難経路を4経路設定し実施した。訓練当日には講師の賀数氏に避難状況を検証していただき、成果と課題を全児童・職員で共有した。



避難状況①



避難状況②



助言する賀数氏



事後学習の様子

#### ② 「暴風・大雨洪水警報」

ここ数年を振り返ると、大雨警報発令の頻度が増している。本校は河と海に挟まれた立地で、今年度も大雨警報が発令されることを見込み、保護者の協力で臨時早下校を実施し、事なきを得た。

#### ③ 「火災・不審者避難訓練」

地震津波と同様、年一回警察や消防を招き、指導助言を生かし児童、職員への危機意識を高めている。

#### ④ 校長の指導性（リーダーシップや関り）

- ・校長として児童の安全(命)を守ることを託されていることから、想定される全ての災害、事故に対して迅速な対応と適切な指示をする。
- ・日頃から児童、職員に対し「危機予測能力」と「危機回避能力」を高める安全教育を実施する。
- ・新たな避難場所を設定するため行政と連携する。

#### ⑤ チーム学校（機能する組織体制づくり）

- ・常に緒問題を自分事として対処する意識の構築。
- ・マニュアルの確実な運用を心掛けながらも、場に応じた行動ができるよう意識させ実行できる人材形成。
- ・PTAと学校の現状を情報を共有し、対応策など常に話題あげ、課題を共通認識していく。

### (4) 豊見城市立長嶺小学校の実践（児童数513名）

これまで、教育事務所や市教育委員会の指導主事として、学校事故や保護者からの相談に対応してきた中で学んだことがある。学校事故では、教職員の安全に対する見通しの甘さがあったこと、保護者からの相談では、学校や担任等の説明不足や管理職まで情報共有がなされていなかったことを発端として、保護者の不信感が増大し問題が大きくなるケースが非常に多いことである。

そこで、校長として「安心・安全で楽しい学校」にするため下記の実践を推進している。

#### ① 校内研修における応急手当の実技講習

中学校保健体育教師として、中学生を指導してきた経験がある校長が講師を務め、養護教諭と協力して実技講習を行った。

＜研修内容＞

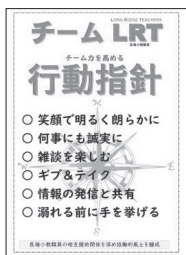
ア. 心肺蘇生法・AEDの使用方法（校長）

イ. 止血法・エピペンの使用方法（養護教諭）



② 教職員の行動指針を提示

「安心・安全で楽しい学校」を体現するため、本校教職員の「行動指針」を提示し共通理解を図った。これは、教職員の具体的な行動を示すことで、連帯感を高め、組織体制を強化し、あらゆる学校課題に全職員で取り組む協働的風土を醸成することを目的として提示した。



③ 保護者等からの相談対応マニュアルを作成

保護者等から、教職員の指導の在り方やいじめ等について相談があった場合、その相談に対する教職員の不適切な対応が問題を悪化させることがある。また、報連相が機能しておらず、問題が悪化するまで管理職が把握できていない場合は、更に問題悪化に拍車がかかるケースもある。

そのような事態に陥らないよう、校長として、報連相を行いやすい環境や雰囲気（行動指針）づくりを推進するとともに、保護者等からの相談対応マニュアルを作成し、教職員全員と共通理解を図り、共通実践を推進している。

④ 避難行動の実践力を身に付ける取り組み

体育や集会で体育館又は運動場へ移動する場合や、給食準備の際には、常に2列縦隊で移動することで、避難行動を習慣化している。

有事の際の実践力を身に付けるため、教師・児童がともに、日頃行っている2列縦隊歩行の意義を理解し、避難行動を意識して行わせることが重要である。校長として、教職員には職員会議や校内研修において、児童には全体集会の校長講話で意義を説明するとともに意識の向上を図った。



5 成果と課題

(1) 成果

① 具志頭小学校

・各専門機関と連携した取り組みや集会活動を計画的に実施できたことで「自分の身は自分で守る」という意識を持たせながら安全教育に取り組むことができた。

② 津嘉山小学校

・定期的な学校施設の安全点検を実施することに

より、施設の修繕を迅速に行うことができ、児童の安全確保ができた。

・危機管理マニュアルの整備や各避難訓練の実施を通して、児童・教職員の危機管理に備える意識が向上した。

③ 糸満南小学校

・防災の専門家を招聘しての研修会を実施したことで、職員の防災に対する知識だけでなく危機対策や危機意識の向上が見られた。

・避難訓練を実施することで、本校の立地場所が地震や津波に対して如何に危険な場所であるかを児童職員に意識づけることができた。

④ 長嶺小学校

・養護教諭が不在でも、適切に応急手当を実践している。

・教職員のコミュニケーションが増えた。

・避難訓練の際、児童の避難時間が昨年度以上に短縮された。

・保護者や来校者に対し、教職員が丁寧な接遇を心掛けるようになったことで、学校に対する信頼感がより高まった。

(2) 課題

① 具志頭小学校

・様々な事件や事故から児童を守るためには、保護者や地域、学校が更に連携・協力し取り組む必要がある。

② 津嘉山小学校

・コロナ禍により、保護者地域と連携した安全見守り等の再構築を行っていきたい。

③ 糸満南小学校

・国道を横断しない避難経路を設定。今後、行政の協力を得ながら近隣ビルとの避難締結を目指す。

・危機管理意識の向上をあらゆる面での育成。

④ 長嶺小学校

・問題が発生した際の報連相が定着していないため、習慣化する必要がある。

6 おわりに

学力向上、特別支援教育、不登校問題、いじめ対応など、様々な教育課題を抱え多忙化する学校現場において、学校安全だけに特化して学校運営を行うことは難しい。しかし、学校教育において児童および教職員の安全・安心を守ることは最優先の責務であり、学校経営の非常に重要な要素である。日常の安全管理体制を万全にすることや、交通安全教室や避難訓練、救命講習などの取り組みを単なる学校行事として形骸化させないためには、校長のリーダーシップの下、教職員の危機管理意識を高め、学校教育の日常的な取組の中に重大な事件・事故を未然に予防するための仕組みを確立することが必要である。



## 第8分科会

## 研究主題

社会形成能力を育む教育の推進  
～自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の  
推進～

提案者：上間久仁（兼次小学校）  
司会者：屋良篤（伊平屋小学校）  
記録者：島袋洋（伊江小学校）  
運営委員：島袋洋（伊江小学校）

## 1 はじめに

共同研究者の各学校は、沖縄本島の北部、本部半島とその周辺離島に位置している。

それぞれの地域には、豊かな自然環境、歴史・文化、地域行事、地域人材等の「ヒト・モノ・コト」とよばれる地域教育資源が豊富に存在している。

各学校では、特色ある地域教育資源を活用したキャリア教育に取り組んでおり、「基礎的・汎用的能力」の育成をめざした教育活動が展開されている。

今回は、地域教育資源を活用したキャリア教育に視点をあて、各学校での取組をまとめるとともに、校長の理念や指導性により、どのように社会形成能力を育む教育が推進されているのかを明らかにする

## 2 主題設定の理由

グローバル化や人工知能（AI）等の技術革新が進み、予測困難な時代といわれる中、子ども達には、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、より良い社会や人生を切り拓いていく力が求められている。学校での学びをとおし、子供たちがそのような「生きる力」を育むため、学習指導要領においてキャリア教育の一層の充実を図ることが明示された。

「沖縄県キャリア教育の基本方針」では、キャリア教育で育成すべき能力を「基礎的・汎用的能力」とし、すべての教育活動を通じて育成が求められているとしている。「基礎的・汎用的能力」とは、「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」のことで、「かかわる力・振り返る力・やりぬく力・みとおす力」とし、「か・ふ・や・み」としてわかりやすく示している。

キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」の一つである「人間形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力であり、社会とのかかわりの中で生活をしていく上で、基礎となる能力である。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。

そこで、本分科会では、これからの社会を創りあげていくために必要な知性と創造性ととともに、豊かな人間性を身に付けさせるため、自立・協働・創造の心を育むキャリア教育を推進する必要があると考え、本主題を設定した。

## 3 研究の視点

- 地域教育資源を活用したキャリア教育
- 校長の果たす役割と指導性

## 4 研究の実際（各学校の取り組み）

## 【伊平屋村立伊平屋小学校】

## (1) 本校の取組

本校は島内の地域素材を生かし社会科や生活科、総合的な学習の時間等において地域コーディネーターと密に連携してキャリア教育を踏まえた学習に取り組んでいる。その一環として校長も同行して下記のような授業を行った。

「2年生 飛び出せ村のたんけんたい」

6月に地域の公的施設や地形、島の観光地などについて見学し、そこで見たこと感じたことなどをメモしながら学習を進めた。

歴史民俗資料館では、人々の昔の暮らしの様子を知る道具などを見て、今の生活必需品との違いを感じ取っていたことや、漁協では、特産品の「もずく」が生産されていることを間近に感じることができた。また、今では観光地になっているが昔は人々のいこいの場であった年頭平松（樹齢約350年の松）や自然がつくった神秘的な洞窟「クマヤ洞窟」を見学し、「すごい、大きい、眺めがいい」等、島の自然遺産に改めて誇りが持てたようだった。更には、腰岳の展望台から方位磁針で東西南北を各自で確認し、どの方向に何があるか、また、近隣の島々はどの方向に見えるのかなど、ワークシートの地図上に印をつけて地域の様子、地形などを学んだ。

このような学習をするに当たり、外部講師やコーディネーターとの言葉のやりとり、礼儀、あいさつ等も含めキャリア教育の4つの力「かふやみ」を育成する一助になっている。

校長の経営理念の下、教師が意図的に授業を仕

組み、子ども達のキャリア形成力をスモールステップで積み重ねていくことは、小学校低学年において重要だと考える。



ワークシートの地図に印を書き込む2年生児童(写真1)

(2) 校長の理念と指導性

沖縄県キャリア教育の基本方針の中で、「基礎的・汎用的能力の育成」が示されている。それは、すべての教育活動を通じて育成されるもので4つのポイント「人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力」を意識した年間計画作成が重要である。

その具現化を図るために日々の授業はもちろん、地域人材の活用や体験的教育活動等も計画的に取り入れ、学校全体で実践していくことが大切である。

校長としてPDCAサイクルを踏まえた教育計画を作成し、地域の「人、物、事」を積極的に活用した教育活動を推し進め、実践的・活動的な授業づくりを目指す。それらは、子ども達の社会性を高め、将来の人生をよりよく生きるための術として大変重要と考える。

グローバル社会に生きるこれからの子ども達に、地域を支える職業や地域の特性を理解させるとともに、多種多様な職業があることに気づかせ、社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を身につけさせたい。

【伊江村立伊江小学校】

(1) 本校の取組

本校は創立140年を超える歴史と伝統を持つ学校である。沖縄県北部の本部半島より北西9キロに位置する伊江島に本校はある。風光明媚な農村地域にあり、葉タバコ栽培や花卉園芸、畜産業は県内トップクラスの生産実績を誇る。

島には高等学校がなく中学を卒業すると、親元を離れ一人で本島に渡り生活を送らなければならない小中学校ではその土台作りが求められている。保護者

や地域の教育に対する思いは熱く、「15の島建ち」に向け、みんなで子ども達を見守っていく気概が根付いている。

そのため村教育委員会等とタイアップした様々な取組みや学校独自の実践が行われている。その中で社会形成能力を育むことも行われている。

① 村の素材を生かした理想のレストランプログラム

村教育委員会が(株)先端教育と連携を図り、「地元の素材を活用した自分たちの作ってみたいレストラン」をテーマに、16時間をかけて班で検討し最後はプレゼン形式で保護者に発表するプロジェクトに取り組んだ。このプロジェクトを通して、収支も考えることで仕事に対する考え方や難しさを学習する。

また、村内事業所へのフィールドトリップを行うことで、じぶんたちの想像との違いを確認し、実体験を企画に落とし込む体験を行う。レストランという身近な業種を収支等も含めて検討することで社会の仕組みを理解することも学べる取組となった。



プレゼンの様子(写真1)

② 毎学期一回、年3回の「子どもが作る弁当の日」

村学力向上推進委員会家庭教育部会が中心となり、食の大切さについて気づくことをねらいとして、5・6年生は自分で弁当をつくり給食時間にみんなで食べる取組を行っている。

献立の作成、食材の調達、調理、片づけまで



児童が作ったお弁当(写真2)



の一連の流れを保護者のアドバイスを受けながら子供自身が行う。「親子の会話」「生産者・調理者への感謝の心」「栄養バランスを考えた手料理」を身につけることが目的で取り組まれている。

## (2) 校長の理念と指導性

児童が「15の島建ち」や「将来」を見通せる力をつけ、自立した幸せな人生を送ってほしい。本校キャリア教育の推進事項に『「学ぶ意味」と「働く意義」を実感し将来への目標に取り組むことができる。』と謳われている。学校と家庭、地域、行政機関が連携してキャリア教育を推進することが基本とらえ、「かかわる力」「振り返る力」「やりぬく力」「みとおす力」の視点を日常の授業から実践できるよう教職員への週報コメントや職員集会等で繰り返しお伝えしベクトルがぶれないように実践を重ねているところである。

学校の取り組みを保護者や地域、外部機関へ学校だよりやHPを活用し取り組んでいる目的を共有している。なお一層指導力を研鑽していくことを目指したい。

### 【今帰仁村立兼次小学校】

#### (1) 本校の取組

本分科会の研究主題は「社会形成能力を育む教育の推進」である。社会形成能力はキャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力の中で、人間関係形成能力とともに「かかわる力」として示されている。

本校では地域の特性を生かした教育課程を編成し地域教育資源を活用したキャリア教育に取り組んでいる。各教科や総合的な学習の時間等において、地域連携コーディネーターが授業づくりから関わり、担任と協働で「基礎的・汎用的能力」の育成をめざし取り組んでいる。

その中で特に「社会形成能力」育成に向けた取り組みを紹介したい。

##### ① 「かふやみ」の育成を意識した学習

5学年は、総合的な学習の時間に鹿児島県の小学校と地域の特産品を紹介し合うオンライン交流学習を行った。本校の児童は今帰仁名産のスイカを紹介するため、グループ毎に取材や調査を行い、まとめた内容をクイズ形式で紹介した。

一連の学習の過程において「かふやみ」のどの力を身につけたいのかを児童に意識させ主体的に学習に取り組ませるようにしている。例えば、生産者や出荷場への取材申し込みは、児童が直接電話を掛けアポイントを取ることで「かかわる力」を育成する場面を設定するなど、単元計画の中で意図的・計画的に「かふやみ」の育成をめざし取り組んでいる。



農家へのインタビューの様子（写真1）



オンラインでの交流学习の様子（写真2）

#### ② 学習発表会「兼次小豊年祭」の取り組み

3学年と4学年は、地域に伝わる伝統芸能について総合的な学習の時間に学び、「兼次小豊年祭」として学習発表会で披露した。

本校には5つの行政区があり、それぞれの区で豊年祭が行われている。児童はそれぞれの所属する区ごとに分かれ2年間をかけて各区の特色ある踊りや演舞の歴史等を学び、地域の先輩方から直接手ほどきを受け、学習発表会でその成果を発表している。

2年間の学習の過程で生じる児童相互のかかわり合いや指導者である地域の方とかかわり合いを通して、人間関係形成能力や社会形成能力といった「かかわる力」の育成をめざしている。



地域の先輩方による踊りの指導（写真3）



- ③ 児童会活動を通した「かかわる力」の育成  
 コロナ禍で学校行事の制限等があり、全校児童で活動したり、交流したりする機会が思うように持てない期間があった。今年度は、児童会活動を活性化させ交流の機会を増やし、その活動を通して「かかわる力」の育成を図ろうと取り組んでいる。

一班20名程度の縦割り班を組織し、異年齢の児童同士で協力して活動し交流を図っている。春の遠足で行った1年生を迎える会では、縦割り班対抗綱引き大会を児童会が企画した。また、縦割り班での読み聞かせや、ドッジボール大会も児童会を中心に6年生が企画し児童間の交流が活発に行われている。

異年齢同士の児童がともに活動することで、様々なかかわり合いが生まれている。時には意見のぶつかり合いやトラブルも発生するが、話し合いによって解決し、困難を乗り越えることで、人間関係や社会形成能力の育成にもつながっていると考える。



縦割り班対抗綱引き大会の様子（写真4）

(2) 校長の理念と指導性

キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」を「社会に出て必要な力」とし、その4つの能力を「かふやみ」として児童にわかやすく示している。「かふやみ」は学校教育において育成すべき資質・能力の土台と捉え、学校生活全体を通して育成をめざすことを児童・職員・保護者間で共通確認事項としている。

地域連携コーディネーターと担任が授業作りから関われるよう校内組織体制を整えるとともに、校外学習へもできる限り同行し、その様子を校長室便で「教室にホンモノ届けます」というコーナーで情報発信を行っている。また、児童会役員と校長が意見交換を行う機会を設け、児童会活動や学校行事について意見を交わし主体的な児童会活動が行われるよう支援している。

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 地域連携コーディネーターと担任が連携・協働し地域教育資源を活用した授業を実践することで、社会形成能力育成に向けたキャリア教育が充実している。
- ② 校長の理念を明確に示し、職員と共通理解を図り、組織的に社会形成能力を育む教育活動が展開されている。

(2) 課題

- ① キャリアパスポートのさらなる効果的な活用を図る必要がある。
- ② 地域教育資源を活用したキャリア教育が持続可能な取組となるよう、学校・家庭・地域・関係機関が連携・協働できる体制作りを行う必要がある。

6 おわりに

社会形成能力を育む教育活動の一つとして、地域教育資源を活用したキャリア教育を推進してきた。

自立・協働・創造の心を育むために、様々な地域の魅力を探り、体験する活動を行っている。そのような教育活動を通して、かかわる力、振り返る力、やりぬく力、見通す力が育まれて、課題解決能力やキャリアプランニング能力が高まってきていると考える。

今後も、自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進をキーワードに、児童一人一人の生きる力を高めていきたい。

## 第9分科会

### 研究主題

自立と共生を図り、実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携

提案者：知念澄男（真地小学校）  
 司会者：金城和也（仲井真小学校）  
 記録者：福本利江子（古蔵小学校）  
 ”：宮里寧（上間小学校）  
 運営委員：赤松啓介（屋部小学校）

### 1 はじめに

令和5年度4月時点的那覇市内小学校36校の特別支援学級は176学級あり、1024名の児童が在籍し、その数は増加傾向にある。

通級指導教室については、今年度、那覇市内の1校において通級指導教室が増設され、通級指導教室設置校は8校である。指導内容別に言語指導が2校、LD・ADHD等への指導が6校である。

また、通常学級の中に支援を要する児童が多く在籍し、各学校とも、特別支援教育についての理解を広めること、校内委員会の設置、特別支援コーディネーターと連携し、発達障害児の研修を深める等、喫緊の課題となっている。

### 2 主題設定の理由

学校教育の目的の一つである、児童一人一人の個性を尊重し、教育活動を行うには、校内の連携はもちろん、保護者、地域がそれぞれに教育的役割を果たし、同じ方向で協働して教育することが肝要である。

そこで、適切な教育活動を行うために、校長としてどのようにリーダーシップを発揮し、特別支援教育を充実させるかを追求するため本主題を設定した。

### 3 研究の視点

- (1) 特別支援教育の充実を図る校長の関わり
- (2) 支援体制づくり

### 4 研究の実際

#### 【那覇市立上間小学校】

#### (1) 校長の関わり

新年度職員会議において、インクルーシブ教育の理念「共生社会の担い手を育むため、子どもが相互理解を深めることを目的として、すべての子どもが共に学び、共に育つ取組を推進する」を念頭に、校長の学校経営方針を全職員で確認した。また、特別支援教育について、教育計画に記された内容を全職員で確認し、理解を深めた。併せて、特別な支援を要する児童一人一人について、特性の理解と適切な対応を説明し、情報の共有化を図った。具体的には以下のことである。

- ① 本校で育みたい資質能力の一つに、インクルーシブ教育の理念にもつながる「人を大切にする力」

を設定した。

- ② 特別支援教育を学校経営方針に位置付ける。
- ③ 通常学級を含めた個別の教育支援計画と個別の指導計画の見直し
- ④ 経営計画で取組と評価の一体化を明示する。
- ⑤ 教員評価・学級経営案と関連づけ計画達成状況を把握する。
- ⑥ 校内支援委員会を核とした校内支援体制を構築する。
- ⑦ 特別支援教育に係る研修会を計画的に実施する。
- ⑧ 週時程の見直しをする。
- ⑨ 小中一貫教育研究会を通して授業の共有化・情報交換を行う。

#### (2) 支援体制づくり

##### ① 児童支援委員会

児童を総合的に理解するために特別支援教育、生徒指導、教育相談を統合した組織を編成し「児童への具体的支援」にかかる「共有」と「検討」の2つの視点から優先順位をつけて効果的に運営している。

##### ○ 共有すること

特別支援教育の理念・自校の特別支援教育の組織体制・外部機関情報・対象児童の概要・推進体制にかかる課題と解決策など

##### ○ 検討すること

児童の具体的支援策、評価・保護者との連携・対応・外部機関への支援要請など困り感のある児童の実態と具体的支援策が教職員に共有・実践されているかどうかで、支援委員会が効果的に機能しているかが判断される。対応策を講じてもすぐに改善が図れるケースは少なく、時には後退しているように見えることもある。成果を急がず変化を見取り、持続可能な支援を展開している。関係する教職員が自分の経験や持ち味を生かしてできることを考え、連携して支援を実践している。その結果・変化を共有（評価）し、次の支援策を考え実践している。定例会は月1回。構成員は、管理職、特別支援コーディネーター、教務主任、養護教諭（教育相談担当）、特別支援学級担任、生徒指導主任、教育相談支援員、小中アシスト相談員、学年代表1名である。

② 校内就学支援委員会

就学後の学校における児童の適応状態や障害の実態を把握し、適切な就学について協議している。また、市就学支援委員会への申請や判定後の指導支援も行っている。

③ 通常学級担任への支援

（合理的配慮の工夫を促す）

「個別の指導計画」を作成し、個々の児童の困難さに応じた合理的配慮を工夫する。その際、保護者と合意形成のうえで実施していく。

（組織を活用して支援する）

児童の実態を校内全体で把握し、学級集団を離脱した場合のかかわり方や支援方法などの校内の支援体制を構築している。（補助員の割当てと通級指導）

④ 児童や保護者が相談しやすい体制づくり

特別支援教育コーディネーターや養護教諭が保護者相談窓口となり、SC・専門機関とつないでいる。

⑤ 職員研修

特別支援教育に係る校外研修について、絶えず情報を提供し、参加しやすい環境を整えている。校内研修については〇月に実施した。事例を交えながら、発達障害児の理解と支援方法について、実践的な研修を行った。

⑥ 担任と保護者との関係

保護者との面談においては、管理職、学級担任、特別支援コーディネーターと一緒に、支援の理解と指導の方法が伝わるように努めている。

(3) 成果と課題

- 学校経営方針として、特別支援教育を推進することで、職員の意識が高まった。
- 組織体制を強化することで、支援を要する児童を総合的に理解することができるようになり、組織で効果のある対応が迅速に行えた。
- 職員研修により、指導・支援の力量が高まってきた。
- 特別支援学級と交流学級担任との連携で不十分な面が見られる。

【那覇市立古蔵小学校】

本校では、30日以上欠席児童、いわゆる不登校児童及び登校しぶり児童が多数存在し、学力・体力向上取組上、大きな壁となっている。生活習慣の乱れがその大きな要因であるが、集団への不適応を訴える児童・保護者も多く、配慮を要する児童への居場所づくり等、受け入れ体制の整備は本校の喫緊の課題である。そこで、昨年来、本校においては、教育活動全体を通して「インクルーシブ教育」を推進しその改善を図ってきた。

【本校の経営理念】

「誰一人見捨てない 誰一人取り残さない学校づくり」

【めざす学校象（◎は最優先）】

- ◎児童が通いたくなる学校
- 保護者が通わせたい学校
- 職員が勤めたい学校
- 地域が応援したい学校

(1) 校長としての関わり

以下に焦点化し職員と共に取り組んだ

- 4つの視点を踏まえた積極的生徒指導の推進
- 自己肯定感の高揚を図る取り組み推進
- 関係機関との連携による協働体制構築

(2) 取り組みと支援体制

「児童の居場所づくり」「特支教育の啓発」

「全職員協働の個別対応」「異年齢の交流促進」

① 児童の居場所づくり

\*安心して学習や交流ができる環境づくり



☆それぞれの居場所で活動する児童の様子

「校長室横の庭園」(写真左)は、教室に入りづらい児童らが気軽に出入りできる居場所(ヒーリングスペース)として活用。併せて、集団での学習を苦手とする児童には、「個別の学習ルーム」(写真右)を確保し、教育相談員、支援員との連携の下、対象児童の学習保障に努めた。

② 特支教育の啓発

\*児童の相互理解深化に向けた特設授業の実施



☆共感・自己決定を尊重した不適応児童の支援

特別支援学級担任による「特設授業(みんながってみんないい)」を1年から6年全普通学級にて実施、配慮を要する児童への理解深化を図った。児童の中からは、今まで以上に積極的に関わる姿勢が伺え、効果的な取組となった。事後の交流学級担任や同学年児童の理解深化により、交流学級で過ごす時間も増え、集団適応への自信へと繋がった。6年生にとっては、中学校進学後の行動目標も定まり、自立への意欲向上に変容が見られた。

③ 全職員協議の個別対応

\*不登校・集団不適応児童への組織的対応



☆共感・自己決定を尊重した不適応児童の支援

不登校児童や集団不適応児童の多くが抱えるいじめ



や発達障害、貧困の課題に加え、昨年度はLGBTの相談もあり、担任と相談員、生徒指導、寄り添い支援員等、学校内外の関係者協働の下で取組を推進し、対象児童のほとんどが、今年度当初より登校復帰できている。「相談～保護者面談～支援～振り返り・改善」という、関係職員間の丁寧な連携・対応と「共感・自己決定」を尊重した取組で大きな成果を得ることができた。

#### ④ その他：異年齢の交流促進

＊児童の主体性・有用感を育む活動推進



☆1年生の朝の活動補助の様子

校舎内の学年教室配置替えにより、R4年度当初から1年と6年の異年齢交流の活性化が見られた。朝の登校時の世話から給食・清掃の指導補助、休み時間の遊びまで、様々な交流活動が年間を通して実施された。

1年生にとっては安心感の高まりとして、6年生にとっては有用感の高まりとして、それぞれに意識の高揚が見られ、有意義な取組となった。

#### (3) 成果と課題

- 「生徒指導の4つのポイント」と「安心・所属・承認・自立」に沿った学校づくり推進により、児童の自己肯定感や職員の連携・協働への意識が高まった。
- ネット依存児童への、保護者を交えた支援推進

#### 【那覇市立仲井真小学校】

##### (1) 特別支援教育の充実を図る校長の関わり

本校では今年度、知的2クラス、情緒2クラスに加え新たに1年生児童1名の難聴クラスが開設された。特支担任、他職員も難聴学級の経験がほとんど無く、手話を主体とする本児童と児童間、本児童と教職員間のコミュニケーションをどう進めるかが課題となった。そこで又本校がめざす児童像「認め合い支え合い協力して行動する子」育成にも繋がると捉え、特別活動・キャリア教育・SDGsに関連させ、児童会・各種委員会との連携、全校体制で手話による教育活動を推進する。

- ① 校長だよりの発行「手話で挨拶プロジェクト」  
世界レベルでは100人に一人は手話を使っているという。子ども達が多様性を認め、お互いを思いやる心、未来の創造者になれるよう、校内で手話させようと職員・児童へ呼びかけ。
- ② SDGs10「人と国の不平等をなくそう」に関連して、児童会「手話であいさつプロジェクト」その他委員会活動において取り組みを進める。
- ③ 各校務分掌でできること、特別活動・SDGsに

関連し各学年クラスでできることを実施する。

- ④ 校内ICT環境等を活用し、本児へわかりやすい校内諸情報発信を工夫・推進する。
- (2) 取り組みと支援体制づくり

- ① 掲示委員会「手話であいさつ掲示コーナー」設置  
掲示委員会の活動として校内各ポイント、学年フロアに、手話50音、簡単なあいさつの掲示コーナーを設置する。



- ② 児童会との連携「手話であいさつプロジェクト動画」作成

児童会の発案で「おはようございます」等の簡単な手話動画を作成し、校内チャット、校内デジタルサイネージで情報発信を行う。



特に高学年の子が楽しそうに手話表現したり本児を訪ねて手話で交流したりする姿がある。

- ③ 音楽朝会で手話ソング

毎月の音楽朝会で、一部簡単な手話を交えて練習・演奏することとした。簡単なあいさつ以外に、生活に関わる手話表現を経験し関心が高まった。

- ④ 校内デジタルサイネージコーナー

校内2箇所でテレビ、プロジェクターを活用し、行事、部活動等児童の活躍・情報発信をしている。



字幕の多用や、児童会あいさつプロジェクト提示など、本児の学校生活参加を支援工夫していく。

#### (3) 成果と課題

- 既存の校内デジタルサイネージ、手話掲示コーナーの情報発信は、視覚に頼る本児の興味とも繋がりが、校内行事、学校の様子を映像で全児童で共有することができた。音楽朝会、児童会の活用など児童発信の取り組みに繋がった。
- 手話に関する取組事例を参考に、「特別活動、生活科、総合的な学習、SDGs」等、授業実践をどのように推進できるか。

#### 【那覇市立真地小学校】

##### (1) 校長の関わり

本年度本校の支援クラスは、知的2クラス、情緒2クラス、肢体1クラスの5クラスで昨年同様の配置である。しかし、本年度、肢体不自由及び知的に

課題がある女兒Aが入学してきた。現在当該クラスには肢体不自由の5年男児B君が在籍している。昨年度よりAさんの保護者が本校入学を希望していたこともあり、受け入れを前提とした全支援体制づくりを進めてきた。現在でも二人の支援については試行錯誤が続き喫緊の課題となっている。また、本校でも普通学級に困り感のある児童達があり、その児童達の支援についても課題となっている。校長として全職員協働体制構築に向け以下のように特別支教育の充実と課題解決を進めている。

(2) 具体的取り組みと支援体制づくり

① Aさん受け入れに向けての体制づくり

【前年度 R4年度】

- 4月…子ども園園長、副園長と学校三役での毎月定期的な情報共有の場を設定（第1月曜日）
- 5月…市特別支援クラスコーディネーター担当と子ども園(Aさん)の様子を参観及び意見交換
- 6月…那覇みらい支援学校へAさん保護者、こども園長とともに見学。支援学校長と意見交換。
- 7月…市教委人事訪問で人事担当者に次年度肢体クラス担任経験者と、支援員増員を要請
- 10月…教育事務所長との人事ヒアリングにおいて肢体クラス担任経験者を要請
- 11月…Aさん保護者、肢体クラス（チャレンジ5組）教室を見学
- 12月…肢体不自由児受け入れ校との情報共有
- 2月…Aさん保護者と面談（市教委担当者同席）
- 3月…Aさんの通所理学療法士とケース会議。またB君保護者にAさん受け入れについて説明と意見交換。

【R5年度】

- 4月…Aさん受け入れについて全職員との共通理解。また、全支援クラス担任達と今後について意見交換と共通理解。  
・「1年生を迎える会」でAさんとB君を全児童に紹介。
- 5月…本年度の各種避難訓練についてAさん、B君保護者と意見交換。
- 6・7月…肢体クラス担任より、全学年児童にAさん、B君の安全な関わり方、障害についての理解を図るため、朝の時間をつかって各学年フロアにて説明。

② 特別支援クラス担任と協力学級担任との連携・協働体制構築に向けての取り組み

※昨年度本校教職員学校評価で、支援クラス担任と協力学級担任との役割分担や授業の参加の仕方、評価等での共通理解が必要との結果を受け、本年度以下の改善を行った。

【改善点】→支援クラス全担任、協力学級全担任、

管理職、教務が定期的に意見交換や共通理解を図る場を設定した。（1学期2回、2学期3回の計5回）

【主な協議内容】

- ・支援・協力学級担任の受け持つ教科について
- ・各行事への引率者割り振りについて
- ・プール学習への支援クラス担任の参加について
- ・保護者からの要望について
- ・避難訓練、個人面談、家庭訪問の取り組みの共通理解
- ・評価について
- ・給食時の寄り添いについて
- ・よい子のあゆみ作成における分担について
- ・支援計画の作成と経過分析、改善策等の検討
- ・児童達の実態把握と情報共有
- ・次年度に生かすための意見交換等

(3) 成果と課題

- 肢体不自由児受け入れに伴い、事前に各関係機関、職員との共通理解を図ることにより受け入れがスムーズに行えた。
- 特別支援教育についての職員の意識改革を校長がどう具体的かつ計画的に進めるかが課題

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 特別支援教育を、学校経営方針に位置づけ、年度当初に共通理解できたことにより、共通実践の意識が高まった。
- ② 特別支援・生徒指導・教育相談を一つに組織化し、定例会を開催することにより、児童理解が深まり、支援の方向性が明確になった。
- ③ 校内研修を充実させることで、職員の理解と指導法が向上しつつある。

(2) 課題

- ① 現状として、通常学級の中で、支援を要する児童保護者への協力依頼が不十分である。
- ② 客観的に児童の実態が把握できるような体制づくり、継続的な特別支援教育の推進を図る必要がある。

6 おわりに

特別支援教育の協同研究を通して、特別な支援を要する子ども達が各自の能力を生かし将来自立してたくましく生きていけるよう、校長自ら特別支援教育に対する理解を深め、教職員や保護者との共通理解や関係機関との連携に基づく支援体制の充実した学校経営推進のためにも、校長が積極的にリーダーシップを発揮し続けることであると考えている。

## 第10分科会

## 研究主題

新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性

提案者	：稲福盛也	（田場小学校）
司会者	：島袋清	（川崎小学校）
記録者	：伊良波直子	（あげな小学校）
ブロック共同研究者	：宮城卓司	（天願小学校）
〃	：水流伸夫	（具志川小学校）
〃	：島袋盛章	（兼原小学校）
〃	：松田健史	（中原小学校）
〃	：城間修司	（赤道小学校）
運営委員	：岸本五穂子	（安和小学校）

## 1 はじめに

現在学校教育においては、教育DXの推進、教員不足、いじめ、不登校の増加等課題が山積している。その中で、教師は日々の学びを展開する中で、一人一人の子ども達に豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を確実に育み、「生きる力」を身に付けさせる必要がある。そこでコロナ禍が落ち着き始めた今、未来を切り拓く子ども達の資質・能力の育成に向け、校長が明確なビジョンを持ち、質の高い教師集団の育成を目指すことを目的とした研究を進めて行くことが大切である。

## 2 主題設定の理由

予測困難な変化の激しい時代にあって、学力向上については、これまで沖縄県が進めてきた学力向上施策を継承しながらさらに発展するために、学習指導要領や関係法令等を踏まえ、新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育成することが必要となっている。

校長が学校経営において、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」等の授業改善の方向性や、本県の学力向上推進の3つの視点「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」を全校体制で実現していくために、どのように理念や指導性を発揮していくのか、具体的方策について研究を深めたい。

## 3 研究の視点

- (1) 校長の理念と指導性
- (2) 「沖縄県学力向上推進プラン・プロジェクトⅡ」の推進
- (3) 授業改善の推進

## 4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

- (1) 具志川小学校（児童数298名）
  - ① 学校運営と現状

本校は、学年2クラスの中規模校である。今年度は、臨時的任用教諭の割合が高く、授業を受け持つ教員18名中、7名が臨時的任用である。そのうち、1年目が2名、2年目が1名、3年目が1名である。

沖縄県学力向上5か年プロジェクトⅡ(学びの質を高める授業改善・学校改善)を推進するために、方策

Iの授業の質的授業改善に取り組むと共に、授業の基礎・基本、児童理解、学級経営等に力を入れている。

## ② 実践の概要

## ア 【学校経営方針⇒ゴールの共有】

- 上位目標：子ども一人一人が「今日、「学校楽しかったよ!」と笑顔で家に帰り、「明日、早く学校に行きたいな!」と思える学校づくり。そのために、各自が自分事として、自己申告書に、上位目標達成のための手だてを考え、実行し、評価し、振り返る。

## イ 【視点1 自己肯定感の高まり】

- 「安心」「所属」「承認」「自立」といった4つのポイントを念頭においた取組
- うるま市重点項目
  - ・人を大切にする「聴くこと」
  - ・勇気づけのボイスシャワー
  - ・評価改善の充実（目的を持った机間指導、形成的評価⇒授業改善、つまずきに対する組織的・計画的な補習指導）

## ウ 【方策1 質的授業改善】

- 生徒指導の4つのポイントを生かした授業の日常化
- 管理職や同僚による、実践できていることの価値付け、言葉かけ

## エ 【ア、イ、ウの客観的評価の見える化と価値付け】

## ③ 取組みの成果と課題

- 上位目標を共有し、自己申告書と連動させたことでやるべき事が焦点化できた。
- 視点1：自己肯定感の高まりの客観的な評価として、児童質問紙の結果を活用したことで、成果と課題と対応策が明確になった。
- 児童質問紙の結果から、教師一人一人の取り組みが効果的だったことが検証できた。
- 全国学調、学びの確かめの結果は、まだ課題がある。
- 学びの確かめを学びのきっかけとして、テスト後に子ども自身が、課題を見つけ、どんな力が必要かを探し、問い直しする取り組みを全学級で共有し、広げていかなければならない。



項目	1学期	2学期	3学期	4学期	5学期	6学期
【承認】	(1) 自分に、よほど興味あると思いませんか。【監・考・行】					
【承認】	(2) (先生は)あなたのことろまで調べてくれていたと思いませんか。【監・考・行】					
【承認】	(3) 学校に行くのが好きになりましたか。【監・考・行】					
【承認】	(4) 物事を最後までやり遂げたうれしさを感じましたか。【監・考・行】					
【承認】	(5) 学校の学び(授業)を学んでいますか。【監・考・行】					
【承認】	(6) 人付き合いが、進んで行かなくなりましたか。【監・考・行】					
【承認】	(7) いじめ被害、いじめ被害者でもいじめ被害に巻き込まれましたか。【監・考・行】					
【承認】	(8) 家で自分で計画を立てて勉強していますか。【監・考・行】					
【自立】	(9) これまでの授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたと思いませんか。【監・考・行】					
【自立】	(10) 学校の先生との間で話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いませんか。【監・考・行】					
【自立】	(11) 勉強で努力することは大変だと思いませんか。【監・考・行】					
【所属】	(12) (先生は)授業やテストで問題を解くことが、理解しているかどうかわかり、自分自身で考えていると思いませんか。【監・考・行】					
【所属】	(13) 授業で先生が話し合っているとき、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いませんか。【監・考・行】					
【所属】	(14) あなたの学校では、授業方法をよりよくするために学校会(学級活動)で話し合い、互いの考えを深めたり、広げたりすることができていると思いませんか。【監・考・行】					
【所属】	(15) これまでに受けた授業で、コンピュータなどのICT機器をどの程度利用しましたか。【監・考・行】					

(2) 赤道小学校（児童数562名）

沖縄県学力向上推進5カ年プラン・プロジェクトⅡの方策5では、「これからの学校では、ESD（持続可能な開発のための教育）を通じたSDGs（持続可能な開発目標）の実現に向けて、一人一人の児童生徒が持続可能な社会の創り手となることのできるように取り組むことが求められる」と述べられている。そこで本校では、方策5の具現化に向けて以下のような実践に取り組んだ。

① 学校と地域で「目指す子ども像」を共有する

今年度の学校経営ビジョンを策定するにあたり、令和4年10月に学校運営協議会を開催し、地域の方々と学校経営について意見を交わし、「目指す子ども像」について議論した。最終的に「地域を大切に作る子」の育成を共通の目指す子ども像とした(図1)。



図1

また、地域と学校が目標を共有しやすいようにSDGsの目標（国や地域、男女の違いなど）に関係のない、世界中の人々の目標（を）を各月の目標として設定し、目標を達成するためのカリキュラム（赤道小学校「SDGsでつなげる学びのバトン構想」）を作成した。

本校では、「SDGsでつなげる学びのバトン構想」のイメージ図にあるように、実践をつなげカリキュラムが有効に機能するように、図を用いて実践についてのイメージ化を図った(図2)。学校運営協議会で承認したカリ

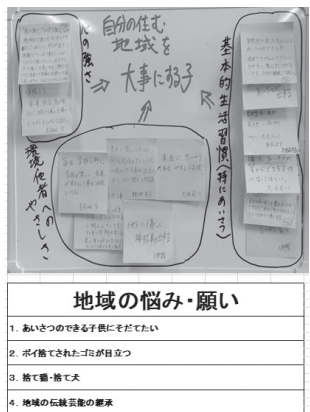


図2

キュラムの構想について、校長講話を通して児童・教職員にその内容を伝え（例えば4月はSDGs17番：あいさつの重要性）、校長講話の内容を学年主任が自らの言葉で学年集会の場で説明し、各担任が授業でその価値について児童に考えさせることにより児童の行動変容につなげ、学校運営協議会で子どもの姿を評価するといったサイクルである。

② 取組の成果と課題

- 地域からの意見を集約したことで、学校運営の方向性や目標をより深く共有することができた。
- SDGsを各月の目標に設定したことで、地域と連携した取組みや教科横断的な学習活動が具現化され、主体的な子どもの姿が見られるようになった。

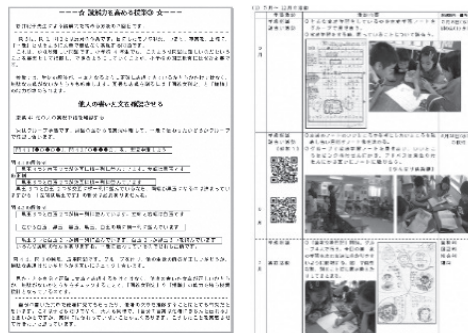
● 子どもの変容の評価方法

(3) 天願小学校（児童数780人）

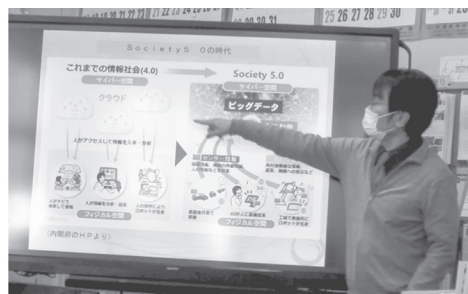
4月より天願小学校に赴任した。これまで本校は学習規律の確立や補習の充実を中心とした取り組みだったため、「自立した学習者を育成」する活動に変更するために、次のような取り組みを行った。

① 具体的理論を理解するための取り組み

ア 毎週発行する校長便りの裏面に理論を掲載



イ 職員会議前に毎月、20分程度のプレゼン



ウ 理論を理解させるために職員室に本を設置



② 理論を元に、授業での具体的実践方法を理解させる取り組み

ア 実践事例の動画をサーバにアップし共有



筑波大学附属小学校理科、辻先生の授業動画

イ ひとり一授業で相互参観

③ 授業を実践し、改善する取り組み

ア ひとり一授業を参観し、フィードバックを与える。

④ 今後の取り組み予定

- ア 週時程の見直しによる学習時間を確保する。
- イ バンチテーブルを購入し、放課後の学習スペースの設置する。
- ウ 高学年が低学年を教える仕組み作りを行う。
- エ 学年で教科担任制を導入し、得意教科の伸ばす活動と働き方改革を両立する。

(4) 田場小学校（児童数861名）

① 学校運営と現状

本校では、新学習指導要領の趣旨を生かし、児童に身につけさせたい資質・能力を明確化にし、主体的に学び、他者と協働し自らの道を拓くための基礎的・基本的内容の定着を図る教育活動を展開している。令和4年度から校内研修において、市教委が推奨するSEL-8S技法を通して「お互いを認め合い、協働して問題解決できる児童の育成」を目指し、教師と児童・児童と児童が関わる絆を深めていくことで「楽しい学級・楽しい学校」づくりを進めている。

その結果、学級での絆が深まることで児童が意欲的に学習活動に取り組む姿が多く見られるようになり、全国学力学習状況調査でも全国平均へは届かないが、その差は確実に縮まってきている。しかし課題として、全校児童に対する不登校の割合が市内でも高い。特に通常学級に在籍する配慮を要する児童への対応が難しく、そのことから児童が不登校や学習困難となり、学校全体として学力の差が広がっている。

② 課題解決に向けた校長としての取り組み

校長として未来を見据えた魅力ある学校づくりを推進し、児童の学力を向上させる為に、以下の3の視点から課題解決に取り組んでいる。

- ア 子どもにとって「行きたい学校」づくり  
※キーワードは《笑顔で登校・満足して下校》
- 「できる」・「わかる」を実感させる教育活動の実践を行う

・週時程の完全実施による教育課程の充実

曜日	月	火	水	木	金
活動	読み聞かせ	1 人権 2 記名 3 アンケート	①スマイル ②音読 ③スマイル ④音読	各種朝会	スタサブ 単元

→朝から楽しく活動する雰囲気醸成し学習意欲を高める。

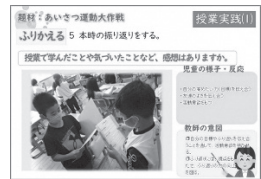
- ・基礎基本の定着を徹底する
- 豊かな心の育成
- ・道徳教育の充実  
(元研究指定校としての実績・実践の継承)
- ・校内研修の充実 (SEL-8Sの理解と実践)

- 不登校の解消
- ・「はあと作戦」+「アクト7」による学習規律の徹底→魅力ある学校・学級

- 新たな不登校を生まない
- 定期的なケース会議による手立ての充実
- イ 保護者や地域にとって「行かせたい学校」づくり

※キーワードは《信頼される学校》

- 学校運営協議会の開催と充実
- ホームページやスクリレ、各種便り等による積極的な情報の発信
- 地域（自治会）やPTAと連携した教育活動の推進
- ウ 職員にとって「働きたい学校」づくり  
※キーワードは《不易と流行》
- 職員の多忙化や多忙感の解消
- ・多忙化の解消
- スキルアップ研修の充実



ミドルリーダーによるスキルアップ研修

- 見通しをもって仕事をする
- ・多忙感の解消 ※達成感を味わわせる
- 学年主任や各種主任を学校経営に積極的に参画させる（企画委員会）

③ 実践の成果と課題

- i-checkによる学校生活に満足していることを表す指数が、全学年とも全国平均を上回ることができた。そのことから、積極的に学習に取り組む雰囲気が醸成されている。

- 不登校の割合がまだまだ高いので、楽しい学校づくり、特に児童の学習意欲の向上を醸成するためにいわゆる「見えない学力」の充実に力を入れていく。

## (5) 中原小学校（児童数851名）

## ① 学校運営と現状

学校組織マネジメントとして「中原っ子4つの力を育むカリ・マネの推進」「信頼のネットワークの構築」「個別最適な学び・協働的な学びの実現」「心理的安全生の高い学校づくり」の4つの柱に取り組み、学校改善・授業改善を推進している。

## ② 「3つの化」の取組

## ア カリキュラムの見える化

子どもの学び・育ちの姿を提示し、子供自身に自らの成長の自覚を促す。諸教育活動を通して、「中原っ子の4つの力」の育ちについて視覚化する。

学年集会等で活用することで、自己肯定感・有用感を高め、相互承認をなす「振り返りの充実」を図るだけでなく、見通しを持たせ子供達の自主性・主体性を引き出す「希望を抱かせる場の充実」を図っていく。



写真1 見える化した学年の掲示物

## イ 学びのサイクル化

単元内自由進度学習やモジュール学習、家庭学習においても「個別最適な学び」の実現を図るとともに、児童自ら学習計画を立て、めあてをもって学習し、学習を振り返って次に生かすという「学びのサイクルの定着」を目指して、「自己調整力・自学自習力」の育成と伸長を図る。

## ウ 児童会活動のプロジェクト化

「なかまるくんプロジェクト」と題し、本校をもっと素敵に学校にするため、児童委員会が月1～2回のペースで企画運営している。児童の自己決定・自己実現の場となるよう「児童会による学校づくり」を教職員で支援していく。

## エ ワークショップ型研修

学校課題や研究内容に基づいたテーマで、異学年教職員の対話による交流の場を設け、互いに支え合い成長する職能集団の醸成を図るとともに、その中で得られた実践知や課題解決策を日々の実践に生かし、子どものよりよい成長へと還元できるように努める。その他、各職員が実施してみたいOJT等を企画し、学校改善・授業改善に資することができるようにする。



写真2 「対話の時間」の様子

## オ 校長の関わり

やりがいを感じる教職員集団づくりに心がけている。上記(2)－①については各学年主任、②については研究主任、③については児童会担当及び児童本人らと対話し、取組の創意工夫のよさを認識させ、課題解決を支援し、誇りを持たせるように働きかけている。教師自身および児童会リーダーのエージェンシーを発揮させることが、学校改善の持続可能な原動力になると考え、校長便りや主任会、連絡会等で上記の取組の意義やよさを職員に伝えている。

## ③ 成果と課題

○ 教師と共に児童らが、日常的に「中原っ子の4つの力」を意識して学習する姿、単元内自由進度学習において主体的に学び続ける各学年の児童の姿、さらにはプロジェクトを意欲的に企画・実行する児童の姿及び楽しんで参加・交流する多くの児童の姿がみられる。また、責任感を持って意欲的に校務分掌を遂行する教職員が増え、職場全体に「トライ&エラー」の風土が醸成されている。

● 職員構成が変わっても、やりがいと誇りをもって職務遂行する教職員集団体制を構築すること。

## 5 成果と課題

- (1) 校長が積極的にリーダーシップを取り、学校経営のビジョンを効果的な手法を用いて丁寧に粘り強く職員に周知することで、職員自らやりがいを感じ、学校の課題解決に主体的に対応する雰囲気醸成してきた。
- (2) 教師が学校課題に主体的に取り組む雰囲気が醸成されることで、授業改善や学び続ける児童の育成を積極的に行うことで児童の学力向上へつながっている。
- (3) 管理職が継続して、教職員集団のリーダーシップを取り続けること。

## 6 おわりに

本研究では、校長の理念と実践について検討した。コロナ禍が落ち着き徐々に成果が見られるが、まだ道半ばである。次年度以降もPP2の方策を継続して取り組み、主体性を発揮し資質・能力を育んでいきたい。